

斎宮跡発掘資料選

平成元年10月

斎宮歴史博物館

斎宮跡発掘資料選

平成元年10月

斎宮歴史博物館

卷頭言

康永元（1342）年冬10月の中ごろ、坂十仏がここを通りかかったとき、「いつきのみやのつかさ」は既に朽ち果てた姿を陽にさらしていた。爾来6世紀余の歳月は、十仏の嘆きをよそにこの地を「幻の宮」と化したのである。途中、幾多の復興運動はあったが、時の流れを超えることはできなかった。その後はわずかな伝承地に人々の遠い記憶を留めていたにすぎない。

「幻の宮」跡とは知らず、この地に初めて発掘調査の鉄を入れたのは昭和45（1970）年の夏のことであった。それが民間企業による宅地開発を原因とするものであったことは歴史の皮肉でもあるが、ひき続き実施した調査過程で後にご紹介する大きな土馬や蹄脚硯などが出土した。想えれば、遠い記憶に結び付く貴重な遺物のおかげで斎宮跡は現代的破壊を免れたのである。その後継続された範囲確認調査によって、140haという広大な田畠の地下に「幻の宮」は眠っているであろうと推定された。

事は重大であり、決して容易なことではなかったが、昭和54年3月27日、国の史跡に指定されたのは、当時の関係者の熱意と尽力はいうに及ばず、地元の地権者諸氏の理解とご協力の賜物というほかはない。同年6月から、現地に調査事務所を開設して発掘調査と普及公開に当たってきた。この間の発掘調査面積は137,000m²で、これは史跡全体の約10パーセントにあたる。検出された掘立柱建物は1,200棟、出土した遺物は整理箱にして8,000箱を数えている。

史跡指定10周年目に当たる本年、「斎宮歴史博物館」として新たなスタートを切ることになったが、われわれの力量が及ばぬために、毎年の発掘調査結果については調査年報を逐次刊行してきてはいるものの、正式な報告書については遺憾ながらまだ公にしない現状である。過去の調査がこの広大な遺跡の各所の様子を探るということに一つのウエイトをおいて実施してきたのはやむを得ぬことであった。今後はそれらの点と点とを結ぶべく努力しなければならない。

それでも過去の調査結果からは本書のなかで触れるような大きな成果を得ていることはわれわれの喜びであり、今後の斎宮跡の解明にとって重要な手がかりになると信じている。140haの地下に眠る史跡斎宮跡は、それ自体が膨大な歴史事典に等しい。従って斎宮跡の解明には歴史学・考古学のみならず、隣接諸科学も含めた学際的な研究が要請されることは今更贅言を要さないところであるが、われわれとしては、報告書を見ない現段階において、せめて過去に出土した考古遺物の中から代表的なものを選んで皆様にご紹介することにした。併せて「斎宮歴史博物館」の開館を記念したいと思う。そして本書が斎宮に関心をもつ全ての人々に資するところがあるならば、それはもとよりわれわれの喜びと言わねばならない。

平成元年10月

斎宮歴史博物館

目 次

| | |
|-----------------|--------|
| 原色図版 | P L 1 |
| 白黒図版 | P L 17 |
| I 調査の経緯 | P 1 |
| II 遺構概要 | P 2 |
| III 遺物概要 | P 6 |
| IV 特殊遺物概要 | P 10 |
| V 特殊遺物一覧表 | P 27 |

付図 調査位置図

特殊遺物出土分布地図

例 言

1. 本書に掲載した遺物は平成元年4月までに出土したものうち、主に特殊遺物を中心としている。
2. 墓書土器については、平成元年4月以降に出土した新資料も一部掲載した。
3. 卷末の遺物一覧表には通し番号を付けて、写真図版・実測図・付図及び本文中で使用した遺物番号と対照できるようにした。
4. 実測図の縮尺については必要箇所にスケールを入れた。
5. 遺構標示記号は次の通りである。

S B ; 建物 S K ; 土塙 S D ; 溝 S E ; 井戸 S A ; 墓 S F ; 道路
S X ; その他
6. 本書の編集、執筆には斎宮歴史博物館調査課の田阪仁、泉雄二、上村安生、御村充生があたり、坂真弓美、松田早苗、橋本奈保子がこれに協力した。また、遺物の写真撮影は高田健司氏に依頼した。





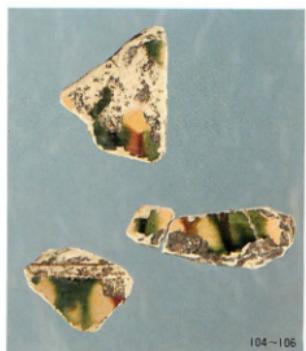


52

53



54







2



3



4



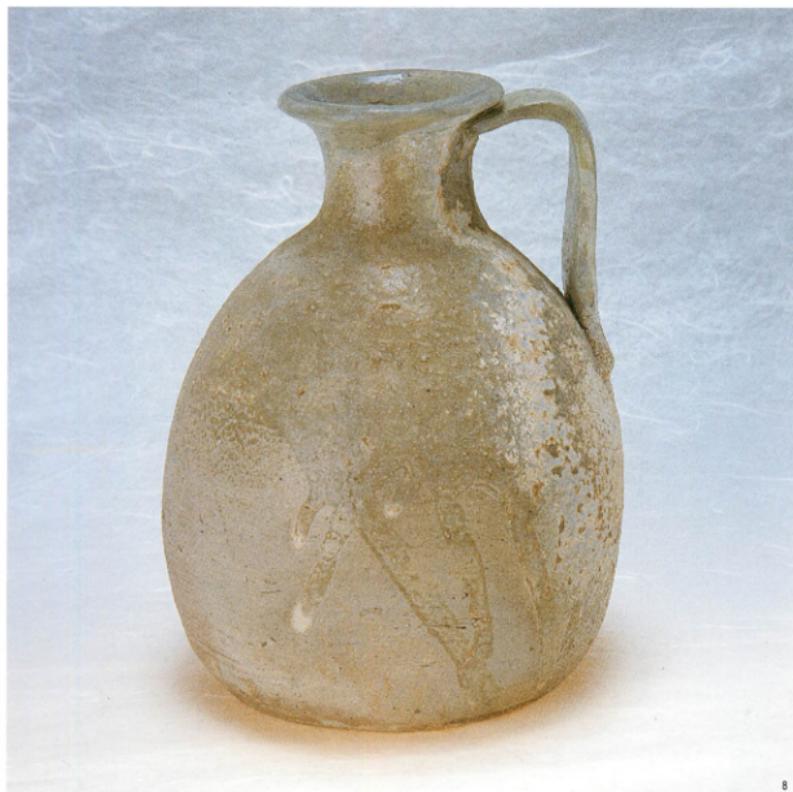
5



6



7



8

図版 8



130



133



156



157



159



173



176



184



181

180



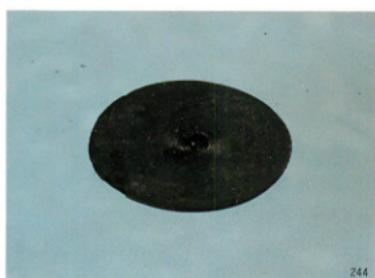
209



209



205





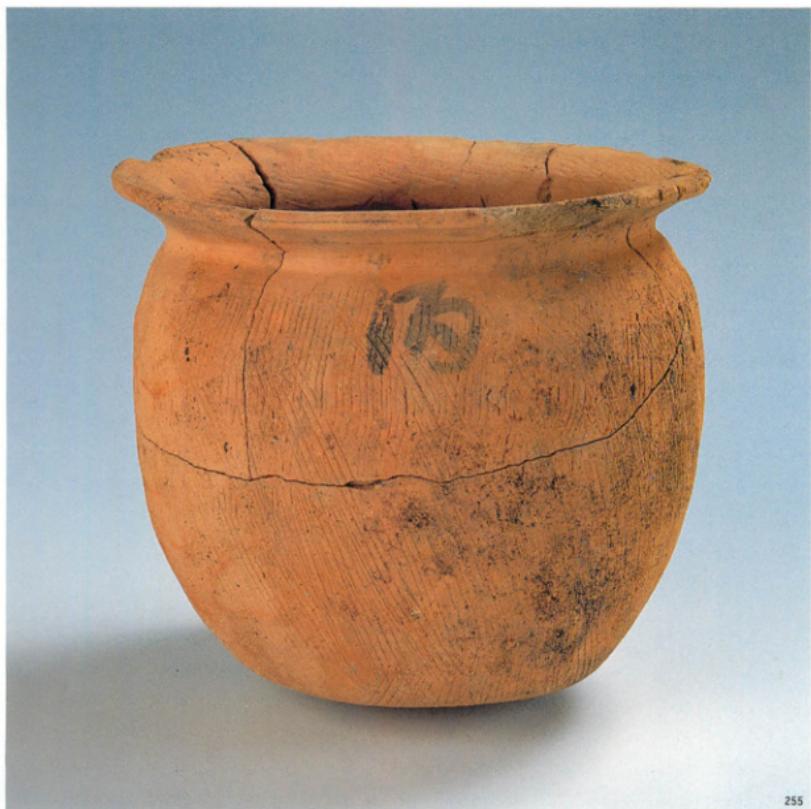




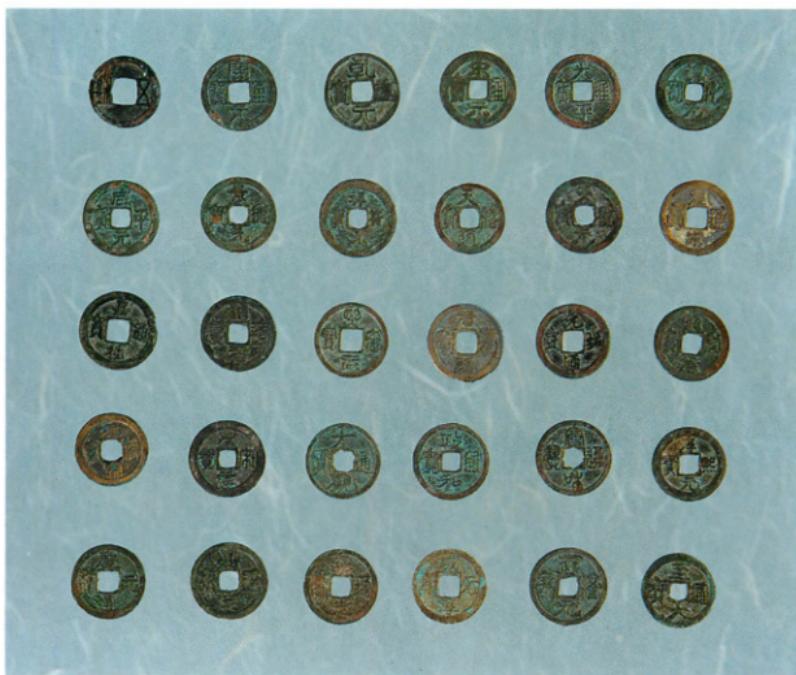
251



252



253

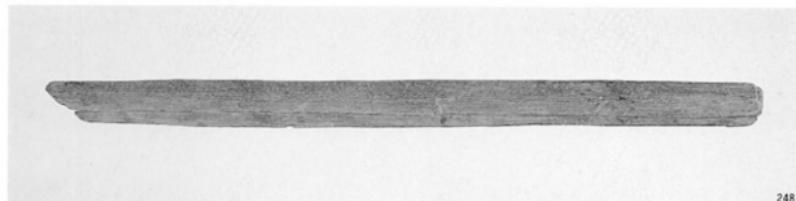


第54次調査 SK3515出土古銭

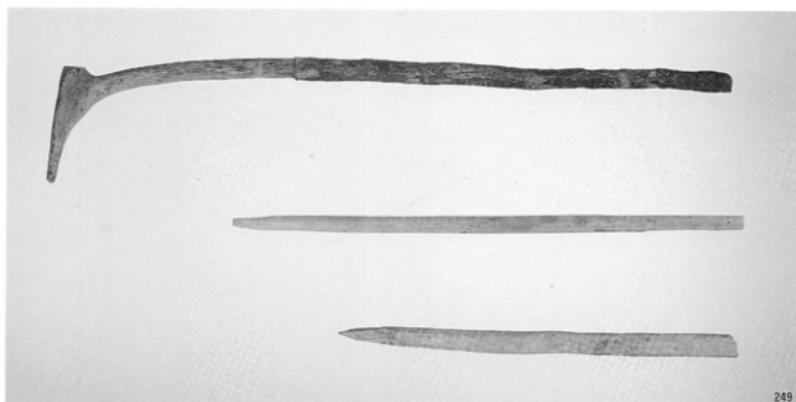




第 52 次 調査 S E 3260 井戸 棒



248



249



213



233



236



221



223



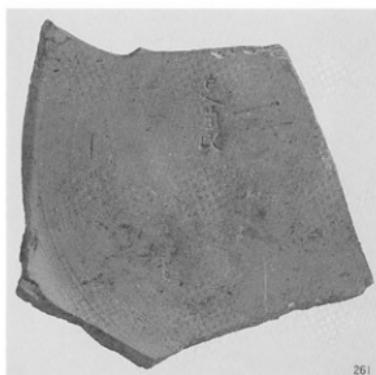
216



231



217





飛鳥時代の土器



奈良時代の土器



平安時代前期の土器



平安時代後期の土器

I. 調査の経緯

国の史跡に指定された年（昭和54年）の6月に、現地に調査事務所を開設して、本格的な計画調査が始まった。調査はそれまでにすでに22次を数えていた。ここでは第23次調査以降の経緯について概述する。

昭和54年度は第23次～29次までの調査を西加座地区、鍛冶山地区等で実施した。第24次調査では正殿、後殿、脇殿と仮称しうる掘立柱建物の配置がみられたほか、柳原地区的第28次調査では、先の第20次調査とあわせて60棟に及ぶ奈良時代～平安時代の掘立柱建物が検出され、各時期の配置に計画性のあることがうかがえた。この年、史跡全体の保存管理計画が策定された。

昭和55年度の調査地は、昭和57年に予定された保存管理計画の見直し対象地区（準公有化地区・C地区）を中心に選定した。並行して実施した中町裏の第35次トレンチ調査の結果、多数の区画溝が検出され、史跡東部の様相をつかむ大きな資料を得た。

昭和56年度も引き続き保存管理計画の見直しに対応するため、C地区に調査区を集中させて実施した。区画溝の実態が次第に明確化した。中町裏の北側、西前沖地区の第37～4次調査で「水司鴨口」のヘラ描き土器が出土したのはこの年であった。当調査地はこのときすでに準住宅地、即ち原則的に現状変更を認め、公有化は行わない地区になっていたが、協議の結果「水司鴨口」の出土した土塙一帯は児童公園として保存されることになった。

昭和57年度には斎王の森の東側に第1回目の史跡環境整備を実施した。整備に先立つ第42次調査では平安時代前期の掘立柱建物や井戸のほか、東西溝と道路も明らかになった。道路は斎王の森の鳥居の下あたりでT字またはL字に交わって南北に続くことが判明した。

保存管理計画の見直しの年にあたり、引き継ぎ史跡東部の中町裏で実施した第44次、46次調査では奈良時代末期から平安時代初期の大型の掘立柱建物や倉庫、区画溝のほか、掘立柱の壠が検出され、この時期の斎宮寮の中心的建物を検討する上で、極めて

重要な資料を得た。史跡東部の中町裏一帯に120mから130m間隔の区画溝が碁盤目状に走ることが明確になってきたのもこの頃からである。

昭和58年度によく保存計画の見直しに一つの結論がでたが、中町裏に関しては第2種保存地区として、5年後再び見直すことになった。一方基本整備構想を策定することになり、全体計画を地域環境計画研究会に委託した。

第51次調査で奈良時代末期から平安時代初期の雨落溝を持つ大型建物が検出され、整然とした建物配置が区画溝の方向と一致することが判明した。第48～51次調査では史跡東部にも奈良時代後期の建物があると判明した。

昭和59年度の第57次調査（中町裏）で「殿司」の墨書き土器が出土した。昨年委託してあった基本整備構想がこの年策定された。

昭和60年度の第61次調査の結果、中町裏の区画溝に囲まれた1ブロック内に、奈良時代末期から平安時代初期にあたる5間×2間の東西棟建物6棟が整然と建ち並ぶことが確認された。そしてこの年、博物館構想が答申された。

昭和61年度は「斎宮歴史博物館」の基本設計担当事務所が選定されると共に、斎王の森史跡公園を東へ拡張整備した。従って調査は、博物館建設予定地、整備予定地のほか、第2種保存地区見直しに対応すべく中町裏でも実施するという多忙さであった。

昭和62年度には博物館の実施設計ができ、1月より工事が開始された。それまでの間に古里地区的建設予定地は全部発掘調査を終了した。第75次調査で「水司」の墨書き土器が出土したほか、從来想定してきた区画溝による方形地割の外で実施した第70～3次調査で、奈良時代末期から平安時代前期の大型の掘立柱建物を3棟検出し注目された。また、第3次環境整備を塚山地区古道沿いで実施した。

昭和63年度には、平安時代初期の整然とした建物配置が中町裏で更に確認され（77次）、また大型建物の存在により史跡南部の重要性が再確認（76～17次）された。前年度に引き第4次の整備事業を上園地区で実施した。

II. 遺構の概要



第39次調査 方形周溝 SX 2232



第72-3次調査 塚山2号墳



第58-4次調査 調査区全景

昭和45年の夏から平成元年3月までの間に発掘調査を実施した面積は約137,000m²、調査次数にすれば第80次調査に及んでいる。ようやく史跡全体の約10パーセントを掘り終えたところである。

1. 弥生時代の遺構

この時代の主な遺構としては今のところ、堅穴住居と方形周溝があるだけである。前者は5棟、後者は12基ある。いずれも史跡の西部、古里地区で検出している。ここは台地の縁辺部に当たり、西下方に戸川と沖積平野を望む位置にある。

堅穴住居も方形周溝も中期のものが多いが、第39次調査（年報1981）のSX 2232（写真）や第76-11次調査（年報1988）のSX 5525は周溝から後期の壺などがまとまって出土した。方形周溝12基のうち8基は博物館建設に伴う事前調査（年報1986・1987）で検出している。

2. 古墳時代の遺構

史跡の西北に隣接する坂本集落に「百八塚」と呼ばれる古墳群があったことは故鈴木敏雄氏の『三重県多気郡上御糸村考古誌考』によって知られている。

この坂本に近い史跡西北部の塚山・古里地区には42基の古墳が確認されている。概ね5世紀末から7世紀前半に属する。墳丘の現存するもの13基、うち1号墳と2号墳にはトレンチ調査を実施している（第72-3、72-4次調査・年報1987）。前者は径21mの円墳、後者は一辺が18mの方墳で、ともに後期のものと考えている。現地に復元した2号墳が博物館の入口に見える。他の調査で周溝が検出されたもの21基、残り8基の墳丘もすでに削平されて、今はない。

その他堅穴住居が2棟古里地区で検出されている。いずれも6世紀後半から7世紀前半に比定される。

3. 飛鳥時代の遺構

この時期の遺構は史跡の西南部と古里地区の北部地域に偏在している。堅穴住居23棟と掘立柱建物もしくは聚の柱穴が6棟分しかなく、今後の調査結果

をまちたい。

天武朝大来皇女の時期の斎宮の建物を、仮に現在の史跡範囲内に求めるとすれば、第58-4次調査（写真・年報1985）のS B4280などはその有力な候補になる可能性もある。

4. 奈良時代の造構

過去斎宮跡で検出された堅穴住居の85パーセントは奈良時代のものである。その平均的な平面規模は、 $3.9\text{m} \times 3.4\text{m}$ で、壁際に竈の取り付くものが約48パーセントある。竈の位置は東または北壁が約87パーセントをしめている。上記平面規模は、同じ三重県下の他の遺跡で検出されている同時代のものと差異はない。

後期の堅穴住居の中には一辺が2mの小規模なもので、竈と煙道の取り付くものがある。あるいはこの時期から厨房施設化が進んでいたのかも知れない。

史跡内の分布状況から見ると、前・中期の堅穴住居は中央部から西部、特に古里地区には多く偏在する傾向があり、後期になると史跡の東部、通称中町裏と呼ぶ地域に出現しあらわる。これは掘立柱建物の分布状況でもほぼ同じである。

古里地区には柱間3間×3間の総柱建物（倉庫・写真）が9棟ある。第4次調査（調査報告1973）のS B35~37は互いに柱通りの方向を同じくし、全般的に規格性をもった配置の見られない前・中期の建物群の中では特異な存在である。

近年、古里地区のほか、史跡西北部を中心として検出される溝持ち掘形の建物も前・中期に属し、3間×3間の総柱建物（写真）になるケースが多い。第72-2次調査（年報1987）のS B4900は珍しく4間×2間で、東柱を持たぬものだった。

後期の掘立柱建物は中町裏に25棟ある。斎宮の中心が西から東へ移ったことを推測させる。

古里地区南部から史跡北辺を東へ走る大溝は中町裏のエンマ川まで続く。一方、同じく古里南部から史跡中央部へ延びる溝S D170は塚山地区を東西に横切り、祓川を渡ってきた所謂「古道」の側溝と考えられる。この古道の一部を復元して、駅から博物館へのアプローチ道にしている。

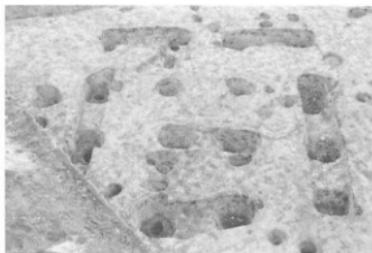
斎宮小学校の付近から北の塚山地区にかけて、更



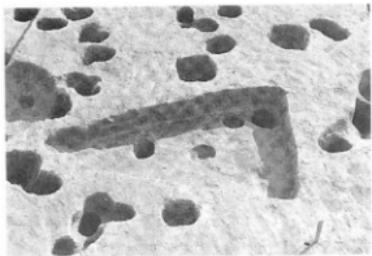
第67次調査 堪穴住居 SB 4426



第76-11次調査 北調査区・掘立柱建物 SB 5530



第68次調査 掘立柱建物 SB 4560



第27次調査 土器焼成址 SK 1263



第51次調査 区画溝 SD 291



第44次調査 掘立柱跡 SA 1411・2675

にそこから東の斎王・楽殿地区へと史跡内を大きく鉤の手に、円形または方形の周溝が17基分布している。主体部を欠き、古墳時代の遺物が一切出土しない、性格不明の遺構だが、斎宮の造営時に削平された古墳の跡とも考えられる。

土器焼成塗が3基ある。斎宮跡で使われた土器は殆ど在地産のもので、近辺には例えばここから東2kmの所に国史跡水池土器製作遺跡があるほか、金剛坂遺跡などでも同様の焼成塗が検出されている。

5. 平安時代の遺構

第72-1次調査(年報1987)のS B 4830を例外として、史跡西部を南北に走る県道南藤原・竹川線以東に分布する。

堅穴住居は4棟しかなく、その規模からいっても既に完全に単なる厨房施設と化している。

約1,260棟に及ぶ掘立柱建物のうち約74パーセントが平安時代に属するものである。

このうち最も多い3間×2間の建物は約500棟で、その内訳は前期47パーセント、中期17パーセント、後期36パーセントである。また、4間×2間の建物は約140棟で、前期46パーセント、中期18パーセント、後期36パーセントである。更に、5間×2間の建物は約130棟あり、同様に前期45パーセント、中期20パーセント、後期35パーセントとなっている。従ってこれら3種類の建物は平安時代を通じてそれぞれほぼ同じような割合で存在したと類推されよう。

平安時代の初期には確実に、いわゆる規格性のある整然とした建物配置が史跡東部の中町裏に出現する。それは同地域で検出される区画溝と大きくかかわっている。

中町裏には120~130mの間隔で碁盤目状に区画溝が走り、その一つ一つのブロック内に斎宮寮の建物が整然と造営されていたことはほぼ間違いないと思われる。後述の墨書き土器の中には斎宮寮13司の役所名に相当する文字が見られ、それらが中町裏に集中していることからも推測される。しかし何よりも、第51次・61次・73次調査(年報1983・1985・1987)や第60次・77次調査(年報1985・1988)などで検出された5間×2間の掘立柱建物には規格性をもつ配置が見られ、柱通りの方向が区画溝と一致している。

考古学的に、これらは奈良時代末～平安時代初期に位置付けられる。その実年代を奈良時代末期のいつに比定するかは後考を要するが、光仁朝～桓武朝の頃に一つのエポックがあったことは否定できない。

初期に見られた建物配置の規格性は、前期に入っても引き継がれたと思われる。一例をあげれば、第79次調査（年報1988）の前期の建物が初期の建物から4～5m東へずれた位置に整然と建ち並ぶ（写真）ことなどからも、それは了解される。

検出された道路に沿って廻（写真）が巡る例は、第44次調査（年報1982）をはじめ3ヶ所（第10・46次調査、年報1977・1982）あるが、いずれも中町裏もしくはその隣接地に限られている。これは斎宮寮の中心的建物を考える上で重要である。また、中町裏では前期に属する大量の土器窪（写真・年報1982）があり、これは祭祀に伴う土器を一括して廃棄したものと考えられ、当地域の重要な性質を物語っている。

井戸も欠かせない遺構の一つだが、平安時代の井戸40基のうち65パーセントが史跡東部に集中している。完掘した例が少なく、井戸枠が見つかったのは第52次調査（年報1983）のS E 3260（写真）が初例である。

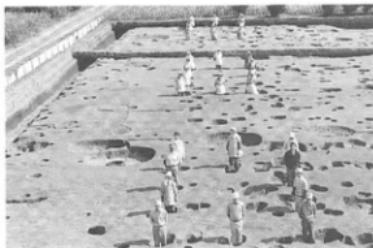
中期にもエポックがある。溝や建物の方向がこの時期にかなり変化を見せている。

斎宮駅の西、小学校の校舎床下に保存されている四脚門は後期のものである。これが仮に文献上知られる斎宮寮の南門に相当するならば、斎宮寮の中心は再び西方へ移動したということにもなろうが、まだ言及すべき段階ではない。

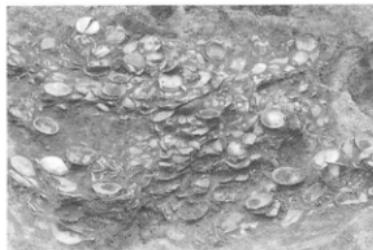
6. 鎌倉時代の遺構

從来古里地区に集中していたが、最近では史跡中央・東部でも顕著になりつつある。幾条もの溝とともに井戸や土壟をともなって掘立柱建物が検出される場合がある。平安時代末期以降の傾向として、柱穴には根石が用いられている。

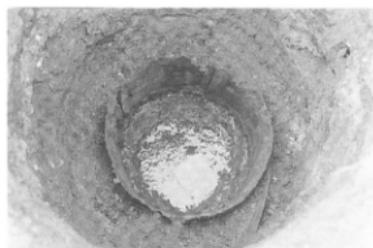
斎宮寮が閉鎖状態にある期間が多々あったことや、所謂中世村落との区別が判然としないこともあります。飛鳥・奈良時代同様、この時代の斎宮についてもなお不明な点が多い現状である。



第79次調査 挖立柱建物 SB1917・5319・5332

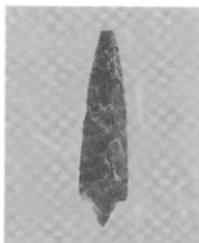


第44次調査 土器窪 SK 2650

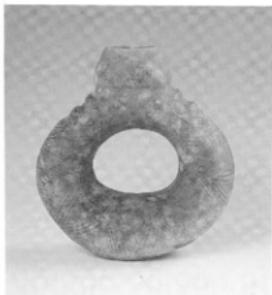


第52次調査 井戸 SE 3260

III. 遺物概要



第57次調査出土 有舌尖頭器



金剛坂遺跡出土 環状壺



古里地区出土 弥生土器

1. 斎宮以前の時代

縄文・弥生時代の遺物

史跡西部にあたる萩川の沖積地を望む台地周縁部で主に出土している。特に、史跡に南接する金剛坂遺跡では縄文時代中期から後期、弥生時代各時期の遺物が出土している。

縄文時代の遺物には、古里地区で出土している晚期末の突帯文土器が少量ある。他に第57次調査の奈良時代末から平安時代初期の土坑に混入していた有舌尖頭器がある。チャート製で両面とも丁寧に押圧削離されている。柳田川下流での発見例は珍しい。

弥生時代の遺物には各時期のものが見られる。最古のものは前期を古・中・新と分けた新段階に相当するもので、胎土には砂粒を多く含み、器表はヘラミガキされているものが多い。

中期の土器の中でも前葉の第Ⅰ様式に相当する土器は、大きく外反する太頭壺で幅の広い荒い波状文や沈線を入れるもの、柳目と刻み目突帯を組み合わせたものがあり、尾張の朝日式に併行するものである。中期中葉になると細頭壺が盛行する。口縁部が受口状を呈し、柳描波状文、柳描横線文が施され、体部の装飾は柳目文の上下に沈線を施し磨消技法の認められる土器が見られる。中期中葉の貝田町式の特徴をもっている。また、太頭壺には愛知県東部の三河地方に分布する瓜郷式に類似するものがあり、海上交通による東海系の土器の影響がこの時期には窺える。この傾向は後期になっても引き継ぎ見られる特徴である。土器以外には、大型蛤刃石斧、石包丁、石鎌が出土している。

古墳時代の遺物

史跡西部にある塚山古墳群周辺の方形周溝、削平された古墳の周溝などから主に出土している。古墳時代後期のものが多く、5世紀末から6世紀のものが中心である。

遺物には須恵器杯・蓋・庖・壺・依壺・甕、土師器椀・鉢・壺・甕などがある。また、円筒埴輪、形象埴輪の破片も少量出土している。

須恵器の時期は陶邑古窯跡群の編年と対比すればT K 23型式まで遡る。埴輪は『古里遺跡調査報告』(1973年)の報文中の溝 S D 65 (塚山27号墳)から多く出土している。川西宏幸氏の編年でいうところの第Ⅳ期に相当するものである。その他第Ⅴ期に相当する埴輪も若干出土している。

2. 墓宮存続期の遺物について

墓宮跡で出土する飛鳥時代から鎌倉時代の土器はその出土量の90%以上が土師器である。主な器種には杯・皿・高杯・壺・甕・櫃・カマドなどがある。

土師器の時期区分については飛鳥時代、奈良時代は前期・中期・後期、平安時代については初期・前Ⅰ期・前Ⅱ期・中期・後Ⅰ期・後Ⅱ期・末期に分類している(年報1983)。

ただ、過去の調査においては本筋など実年代を定しうる資料が共伴しないため、猿投窯、美濃窯などの須恵器、灰釉陶器、縫釉陶器や瀬戸窯、美濃窯、常滑窯、渥美窯などの山茶碗の年代観を参照する一方、平城京や平安京などの先進地域における研究成果との対比によるところが大きい。共伴関係については別表のとおりである。

飛鳥時代の遺物

須恵器には杯・杯蓋・甕などがあるが、その出土量は少ない。良好な資料は少ないが、大半は7世紀後半のものである。蓋は内面に返りを持つもので、後期後半には返りの残るものはほとんどなくなる。

土師器はその出土量の大半が甕で、他の器種はない。供膳具は古墳時代から続く椀が主流であるが、胎土の精良な赤色を呈する杯も若干出土している。内面に放射状の暗文が施されるものもあり、当地域では系譜の迫れないもので、他地域からの土器の移動及び製作技術の伝播がこの時期に求められる。椀は粗製の通称“いなか風椀”と呼ぶもので、暗褐色や茶褐色を呈する。口縁部のみ横ナデし、胎土には砂粒を多く含むものである。

土師器の甕は長胴の大型のものと球形の中・小型のものがある。器面の調整技法は、外には細かいハケメを施し、内面は体部上半を横方向のハケメ、下半を縦にヘラケズリするものが一般的である。

| 時 期 | 標式遺構 | 調査次数 | 猿投窯編年 | 文 獻 |
|--------|---------|-------|-----------------------|--------------------|
| 飛 鳥 | S B1615 | 30次 | | 年報 1980 |
| | S X2735 | 45次 | | 年報 1982 |
| 奈 | S K1255 | 27次 | | 年報 1979 |
| | S K2120 | 36次 | | 年報 1981 |
| 良 | S D170 | 50次 | 高藏寺2号窯式 | 年報 1983 |
| | S E1800 | 33次 | | 年報 1980 |
| | S K3000 | 49次 | | 年報 1983 |
| 中 期 | S K1098 | 21-1次 | 岩崎25号窯式 | 年報 1980 |
| | S K1970 | 35次 | | |
| 後 期 | S K1291 | 28次 | 折戸10号窯式(古) | 年報 1979 |
| 平 | S K1445 | 34次 | 折戸10号窯式 | 年報 1980 |
| | S K1045 | 20次 | 黒雀14号窯式 | 奥棚153年度 |
| 前Ⅱ期 | S K1424 | 44次 | | 年報 1982 |
| | S K3127 | 51次 | 黒雀14号窯式(新) 黒雀90号窯式 | 年報 1983 |
| 中 期 | S K2650 | 44次 | 黒雀90号窯式 | 年報 1982 |
| | S E3134 | 51次 | 折戸53号窯式 | 年報 1983 |
| 後Ⅰ期 | S E2000 | 31-4次 | 東山72号窯式 | 年報 1980 |
| 後Ⅱ期 | S K1730 | 32次 | 百代寺窯式 | 年報 1980 奥棚153年度 |
| | S K1074 | 20次 | | |
| 末 期 | S D3052 | 50次 | 瀬戸窯山茶碗 日没階第4型式 | 年報 1983 |

墓宮跡土師器の共伴関係

奈良時代の遺物

須恵器には杯・椀・盤・蓋・高杯・壺などがある。前期の遺物の中には蓋に返りの残るものも一部混入している。

土師器の杯・皿の成形技法は、前期では底部外面をヘラケズリし、口縁部を横ナデする。この技法は奈良時代を通じて行われるもので、中期には口縁部近くまでヘラケズリするものや、ヘラケズリしない底部未調整のものも出現する。後期になると底部未調整のものが中心である。口縁部と底部の境が明瞭になり、口縁部が外に開くものや、外反し端部がいやや内湾気味となる平安時代的なものも認められるようになる。

また、内面の暗文も時期が下がるにしたがって簡略化の傾向にある。前期では口縁部内面放射状暗文、底部内面螺旋状暗文、全体にミガキを施すものが多いが、中期には少なくなる。杯では放射状暗文の間隔が粗くなり、またそれに替わり螺旋状暗文が単独で施されるものも出現する。皿は口縁部内面の放射状暗文が省かれ底部内面の螺旋状暗文のみのものが多い。後期になると杯には暗文がほとんどみられなくなり、特定の器種（高台の付く杯など）に見られるのみである。皿も暗文の施されるものは少なくなる。

前時代に見られた「いなか風椀」は奈良時代を通じて見られるが、後期には少なくなり、この段階で消滅する。

壺類は器種構成や調整技法は飛鳥時代とあまり変わらないが、飛鳥時代の中・小型のものはやや尖り気味の底部なのに対して、奈良時代のものはほぼ球形を呈する。また、奈良時代全般を通じても形に大きな変化は認められない。

土師器を焼いた土器焼成場は斎宮跡では3基しか検出されていない。斎宮周辺の南部では水池遺跡（明和町明星）などで多数検出されており、斎宮で使用する土器は主に斎宮周辺から運ばれたものと想定できる。土器の製作技法、形態などを見ても飛鳥時代に入ってきた技術、技法が斎宮という消費地をかかえた周辺の生産地で独自に発展していったものと思われる。

特殊な遺物としては三彩陶器が5片、また、輪脚



第70-2次調査出土 鉄製U字形釘先



第70-2次調査出土 柄状石製品



第5次調査出土 瓶・壺

硯や円面鏡などの陶器が出土している他、「水司」、「殿司」などの墨書き土器は『類聚三代格』から知られる斎宮寮の役所の存在を、現地において遺物で立証したと言える。また、土馬など祭祀に関わる遺物の他、鉄製の鍔先や杵状の石製品もある。

平安時代の遺物

須恵器には杯・皿・高杯・蓋・壺・壺などがあるが、前期には灰釉陶器に取って替わられ、以後壺などの貯蔵具のみとなる。

土師器には初期の杯・皿は奈良時代的な要素を残し、底部は未調整のものである。壺には体部上半を縱方向のハケメ、下半から底部にヘラケズリをする調整技法が出現し、以後主流を占める。

前期から灰釉陶器や綠釉陶器が出現する。また、土師器の杯・皿類にはほとんど暗文を施さなくなるのもこの時期である。

前期でも新しい前二期の土器 S K 2650は祭祀に伴う土器類が一括投棄されたものと考えられるもので、出土土器の総数15,238点の構成比率は、土師器98.8%、黒色土器0.2%、須恵器0.3%、灰釉陶器0.4%、綠釉陶器0.3%であり、圧倒的に土師器が多い。

中期になるとそれまでの赤味を帯びた土師器に加えて白味を帯びた杯・皿類が出現する。また、暗文の下限をこの時期に求めることができる。

後期になるとロクロ製土師器が出現し、前段階に比べると土器の様相が一変する。土師器の杯・皿は法量の縮小化が進み、その区別が不明瞭となる。

特殊な遺物には前期までを中心とした円面鏡、風字鏡、石帶などの官衙的色彩の強いものや、土馬、ミニチュア土器、人面墨書き土器など祭祀的色彩をもつものなどがあり、いかにも斎宮跡らしい。

鎌倉時代の遺物

出土する遺物のうち最も多いのは山茶碗と山皿で、主に渥美半島古窯址産のものであると思われる。

土師器は口径が器高より大きくなり、いわゆる「伊勢型鍋」と俗称するものが出現し、主流となってくる。また、わずかだが三足鍋も出土している。

特殊遺物には和鏡や後述するような各種古鏡が11,571枚出土している。



第32次調査 土器窓 SK 1730



第5次調査出土 伊勢型鍋



第5次調査出土 土師器三足鍋

IV. 特殊遺物について

1. 施釉陶器について

緑釉陶器

これまでの出土点数は4000点以上を数え、都の所在地であった奈良の平城京、京都の平安京に次ぐ出土量となった。平安時代前期から平安時代後期のものであり、その生産地についてはすべての分析を終えたわけではないが、東海（愛知、岐阜）、近江地方のものを中心とし、他に京都産のものも若干出土している。

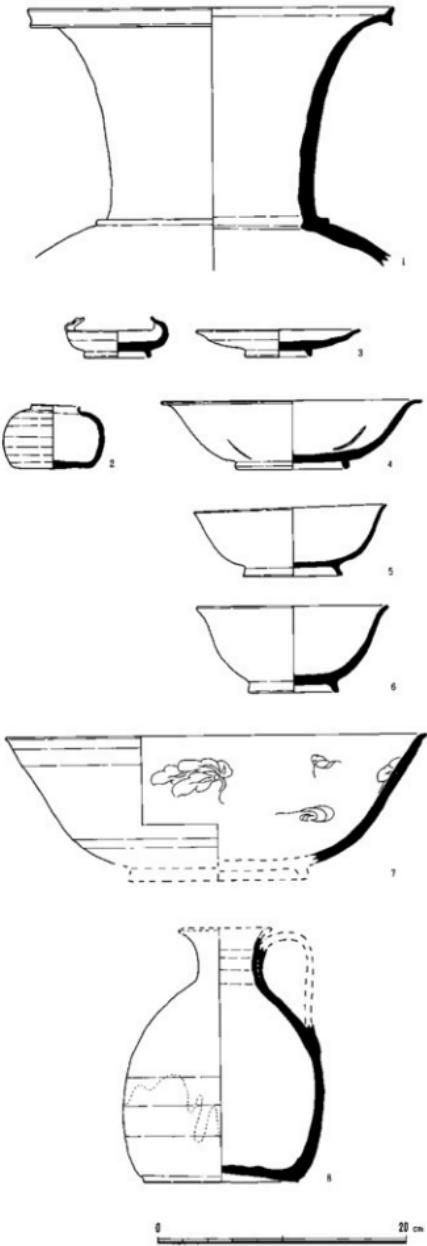
出土点数の分布については、付図2のように史跡西部の古里地区から中垣内地区にかけてはほとんど出土していない。これ以東のはとんどの地区で出土しており、特に史跡中央部の宮ノ前から西加座・鎌治山地区においては顕著に認められる。この傾向は平安時代前期の遺構分布と重なり、中でも第44次調査（西加座地区）では400点以上も出土しており、注目される地域である。

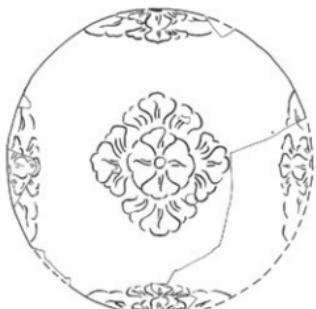
椀・棱椀・皿・段皿・耳皿・鉢・壺・香炉・唾蕊・風字硯など様々な器種のものが出土しているが、その内の九割以上が椀・皿類で他の器種は極めて少ない。

壺（1）は第8-4次トレンチ調査の土塙SK190から出土したもので口径29cm、体部以下は小片が若干出土しただけである。平安時代後一期。釉は濃緑色を呈し、体部は火を受けたため変色している。同遺構からは緑釉の風字硯（158）や口径47cmの大型鉢や壺なども出土し、これらの中には一部火を受けた痕跡が残る遺物もある。この土塙は第59次調査の結果、「」字状の溝の東北隅に位置し、平安時代後期の東西溝SD3890と一連の遺構と思われる。おそらく南西区画内の火災の後に整地し、一括して投げ込まれた可能性がある。土師器の壺のなかには、火災のために溶解した緑釉陶器の軸が張り付いたものもある。

陰刻花文

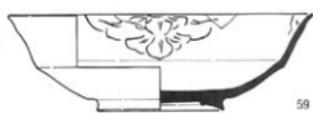
緑釉陶器のうち陰刻花文の施されているものは73点ある。椀・棱椀・皿・段皿・壺などで、平安時





52

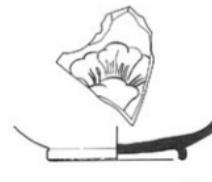
53



35



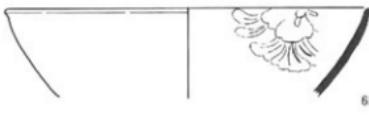
28



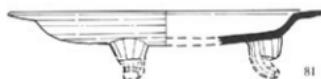
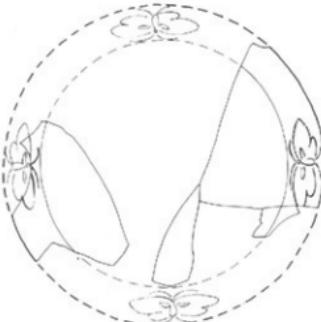
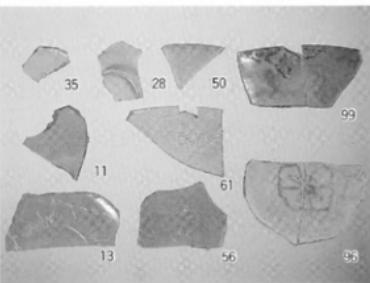
11



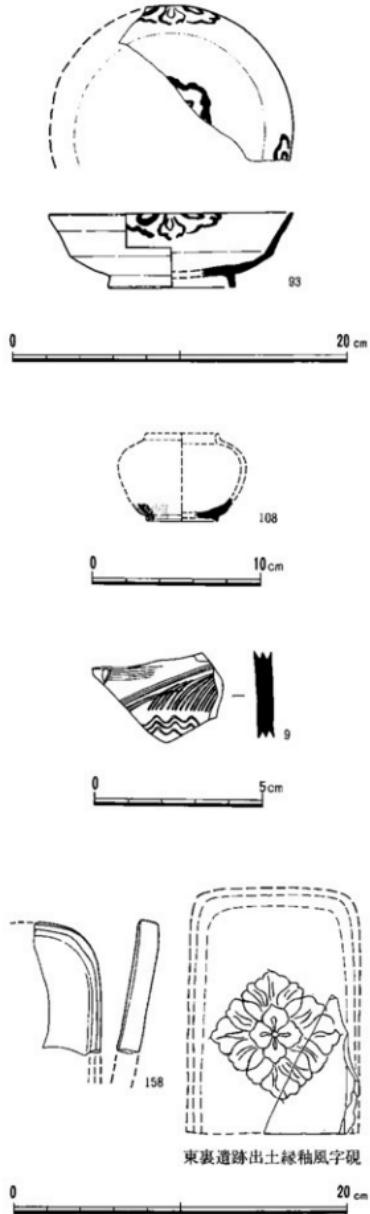
58



20 cm



81



東裏遺跡出土縁釉風字硯

代前期（黒竈90号窯期）を中心とする。縁釉陶器同様、第44次調査（土塙SK1424・2650）やその北側で実施した第51次調査から多く出土している。第44次調査の土塙SK1424は平安時代前Ⅰ期のもので蓋が2点（52・53）出土している。どちらも口径9cm、器高1.5cm前後の小型の蓋である。淡緑色の釉がかかるおり、外側に宝相花文が描かれている。花弁の脈が細かく、輪郭線に接するように描かれ、花弁としては古い様相を持つものである。黒竈14号窯期に比定される。他に同時期のものには28・35・50などが見られる。これらより花弁の脈が簡素化した平安前Ⅱ期のものには土塙SK2650（第44次調査）出土の稜枕59、皿58の他に11・13・56・61などがある。黒竈90号窯期のものである。また、陰刻花文の残る縁釉陶器の風字硯の破片（参考資料）が、窯官から南西4kmの多気郡河田に所在の東裏遺跡から出土している。

花文には陰刻される手法以外に釉の濃淡によって描かれるものが20点ある。SK2650出土の93には口縁部内面と底部内面に花文があるが、他例には草文の描かれるものもある。

また、灰釉陶器にも陰刻花文を有する7が出土している。これは第57次調査（東加座地区）で出土した口径33.4cmの大型の鉢で口縁部内面に大小の花文と渦巻文の三つを1単位とする文様が4ヶ所に描かれる。平安時代前Ⅱ期の遺物である。

三彩陶器

三彩陶器は2ヶ所、5片出土している。いずれも史跡西部の中垣内、古里地区からの出土である。第30次調査では4点出土している。同一個体の短頸壺の破片3点（104～106）、蓋の破片1点（107）がある。第71次調査では奈良時代後期の土塙SK4750から三彩小壺の底部片（108）が出土している。高台径4.2cm。三重県内では鳥羽市神島について2例目であり、祭祀にかかる遺物と思われる。

その他の施釉陶器9・10は縁釉单彩の小片で陶枕と考えられるものである。トレンチ調査のため時期を限定することはできなかった。いずれも胎土は白く緻密であり、濃緑色の釉が片面に掛けられている。搬入品と思われる。

2. 琨について

硯についてこれまでの研究により様々な分類が行
われているが、ここでは蹄脚硯、円面硯、風字硯、
猿面硯、形象硯、石硯に分けることにする。その出
土地点については一覧表と分布図のとおりである。
なお、転用硯（須恵器杯蓋など）も多数出土してい
るが、ここでは除く。

蹄 脚 硯

史跡西部の古里地区から2点出土している。いず
れも脚部の破片で復元すると29cmになるものであ
る。板状の脚底部に三角柱の脚を接合したもので、硯
部と台脚部を別々に作り接合するタイプと思われる。

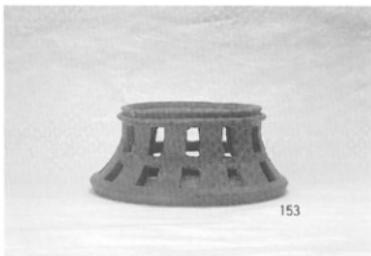
円 面 硯

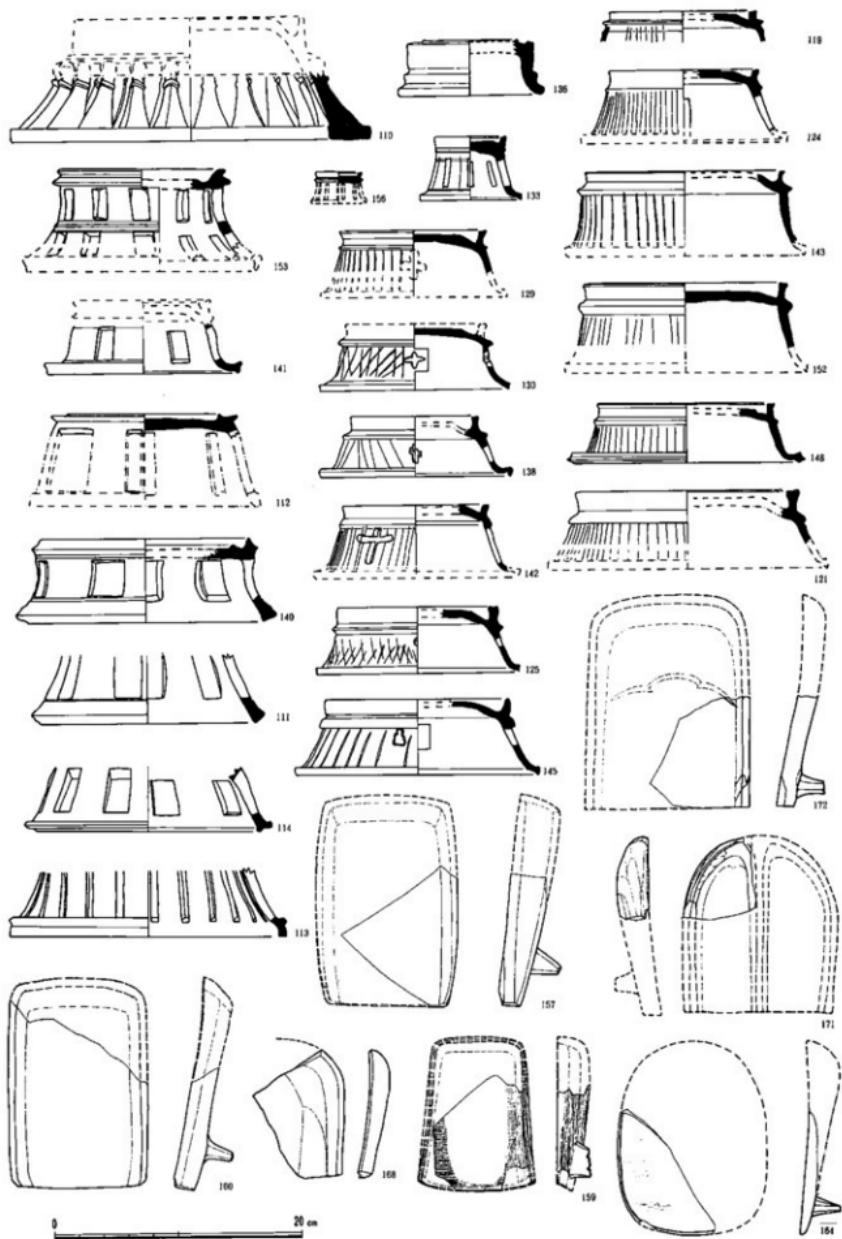
46点出土している。透しの有無とその形態により、
透しのないもの1点、方形の透しを穿つもの18点、
ヘラ描きで透しを表現するもの23点の三類に大きく
分けられる。

透しのないものは第38次調査（塙山地区）の奈良
時代の土壙SK2211から出土した径10.4cmの小型の
もの136がある。硯面の陸と海の境にはわずかな突
帯が見られる有堤式のものである。

方形の透しをもつもののうち、時期の判明する遺
構から出土したものには次のものがある。第70-1
次調査（塙山地区）では奈良時代前期の土壙SK
5102から脚端部を欠くが方形の二段透しをもつ153
が出土した。第48-11次調査（鍛冶山地区）では奈
良時代後期の堅穴住居SB3340から陸と海の境に突
帶をもつ有堤式の140がある。他に有堤式のものは
第30次調査（中垣内地区）でも出土している。133
は第29次調査（東加座地区）の平安時代初期の土壙
SK1445から出土した径5.6cmの小型のもので、脚
部外面には方形の透しとヘラ描きによる透しが交互
に施される。第79次調査（東加座地区）の平安時代
前一期の土壙SK5340から出土した156は径3.8cmの
非常に小型のものである。硯部のみの破片であるが、
方形の透しの痕跡がわずかに残っている。

ヘラ描きされるものは、方形の透しが退化したもの
と考えられ、ヘラ描きとともに数カ所丸型や十字
型の透しを施すものもある。第51次調査（西加座地





区)の土塙S K 3137、第55次調査(御館地区)の土塙S K 3557、第57次調査(西加座地区)の土塙S K 3720など、主に奈良時代末期から平安時代初期の遺構から出土している。

円面硯の出土状況は透しが方形のものは史跡の西部に多く、ヘラ描きされる新しいものが史跡東部の御館から西加座地区を中心とする地域に集中していることが判明している。

風字硯

16点ある。灰釉陶器7点、須恵器2点、綠釉陶器1点、黒色土器6点であり、出土地点は史跡の東部に集中する。綠釉陶器は前述したように平安時代後期、他は平安時代前期のものと考えられる。灰釉陶器のものには海と陸の境に堤を付けた有堤式の172、無堤式の157・160・168などがある。須恵器には、硯面を堤によって二分した二面円頭風字硯の破片(171)も史跡南端の木葉山地区(第70-3次調査)で出土している。黒色土器のものは第44次調査で4点あり、平安時代前Ⅰ期の土塙S K 1424と前Ⅱ期の土塙S K 2650から各2点出土している。また、159は内外面ヘラミガキされるもので硯面には一部使用痕が残る。

形象硯

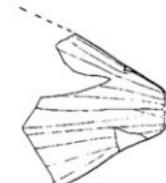
明確な形象硯は出土していないが、第75次調査の奈良時代後期の土塙S K 5083から鳥形硯の蓋と考えられる破片175が出土している。外面はヘラケズリされており、羽毛等は表現されていない。

獣面硯

第59次調査(広頭地区)で2点出土した。そのうち173は平安時代後Ⅰ期の東西溝S D 3890からで、長方形の脚の痕跡が残る。174は硯面には青灰波文が一部残り、脚のつかないものである。何れも焼成前に成形されたものである。

石硯

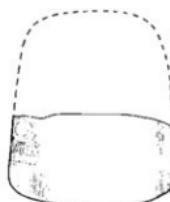
4点しかない。176は古里地区の土塙出土の楕円硯で室町時代。177は第64-2次調査で出土したもので、自然石を利用した不整形のものである。室町時代の土塙S K 4630から出土した。



175



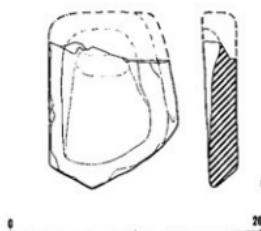
173



174



176



20 cm

3. 土馬について

25点ある。完全な形で出土したものはない。すべて破片で、頭部または脚のみの出土が多く、その全貌を明らかにできるものは少ない。

『奈王宮跡資料』(1978年・三重県教育委員会)では馬具の表現方法により、A・粘土紐により馬具を完備したもの、B・粘土紐と沈線の併用により馬具を表現したもの、C・粘土紐により鞍だけの表現にとどめたものの三類に分けた。巻末出土遺物一覧表の備考欄にこの鞍の表現方法を記しておいた。ハリは粘土張り付けを、ヘラはヘラ書きを意味している。

Aに分類されるものは184の朱塗りの土馬である。朱は部分的に残るだけで全面に塗られていたか否かは不明である。現長29cm、現高17.5cm。馬具は前輪、後輪と居木を粘土張り付けで表現する。居木から下には鏡を表現する粘土紐がみられ、障泥の表現の痕跡も認められ、写実性は高い。

198は頭と脚の欠損するものである。前輪、後輪、居木は粘土張り付けで、手綱、胸繫など頭部から鞍への表現はない。居木から下の部分は剥離しているが、剥離の痕跡から推定すると、鏡、障泥が表現されていた可能性もある。体部は中空で腹部に径2cmほどの穴が穿たれている。平安前期の溝から出土しているが、奈良時代後半の遺物も含まれ、時期については問題が残る。

Bには185・186などがある。いずれも前輪、後輪は剥離しているが、粘土張り付けで、居木も同様に粘土紐で表現される。鏡、障泥はない。手綱、胸繫などはヘラで表現される。体部は中空で尻に穴が穿たれている。

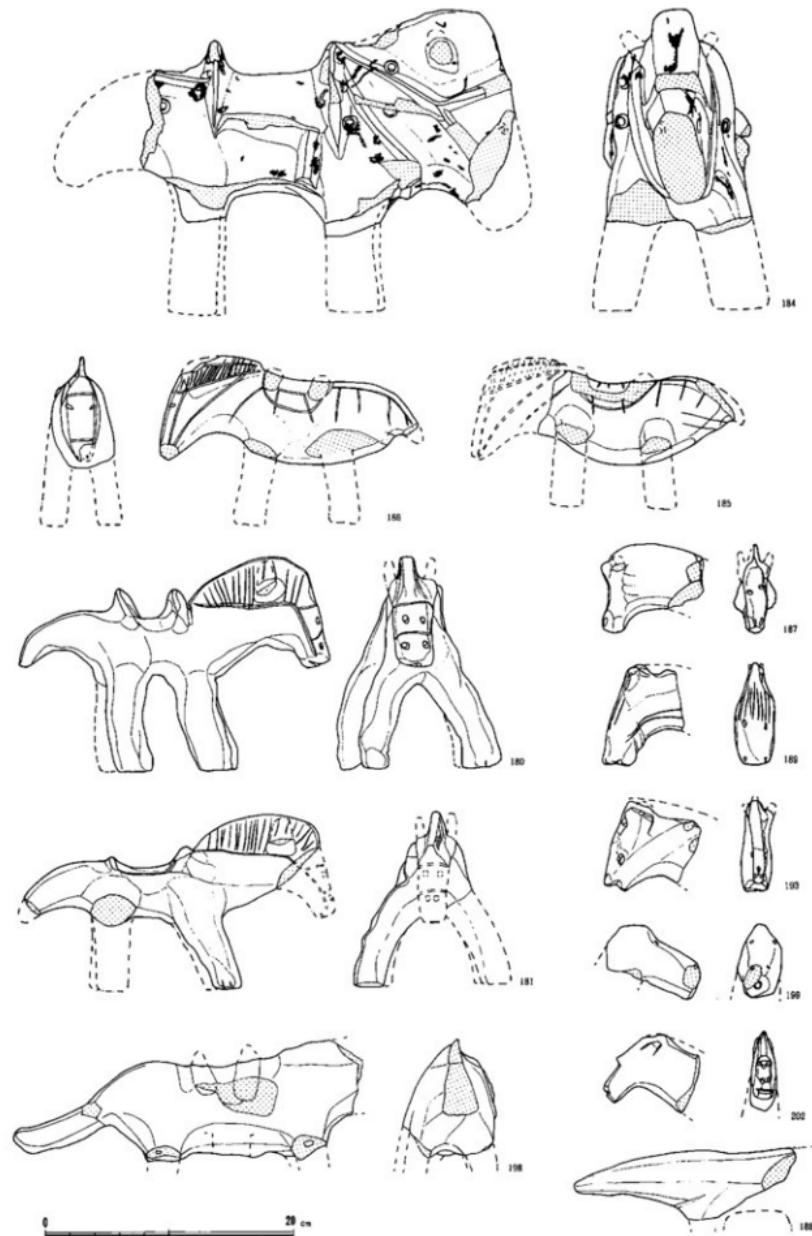
Cには180・181などがある。前輪、後輪のみ粘土張り付けで表し、居木にあたる部分はナデによって表現するものである。手綱、面繫はヘラで表現され、胸繫は省かれる。

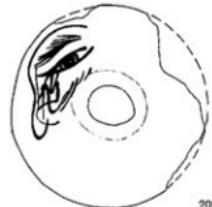
これらA～C類の出土した遺構の明確な時期を明らかにできるものは少ないが、おそらく飛鳥時代後半～奈良時代前半のものと考えられる。出土地点は史跡西部の古里地区を中心とする地域に集中する。

一方、183・193・199・202はいずれも史跡中央から東の地域で出土したもので、頭部のみの出土であ



第61次調査 SE4050出土馬具





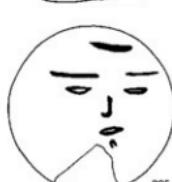
209



206



207



205



208



るが、手柄、面繩の表現は認められない。上述した鞍による分類のA～C類としたものと比較してもあきらかに稚拙なものである。これらはどのような鞍が付くか不明であるが、粘土紐のみの可能性が高い。時期の明らかなものはS E 5380のものだけであるが、奈良時代後半を中心とするものと考えられる。他に、鞍も表現しない188がある。

このほか、馬に関する遺物として、第61次調査のS E 4050の馬歯があげられる。左上顎白歯（1本）と右下顎白歯（3本）の計4本が出土している。この井戸は平安時代前期に掘削されたものである。この歯の出土した位置は上面から約3mの所で、これより上には平安時代後期の遺物が多量に出土した。井戸の用途をなくしたため、埋められたものと考えられ、井戸廃絶の際、それに伴う何らかの儀礼が行われたものであろう。

4. 人面墨書き土器について

5点出土している。この内、4点は平安時代後期の土師器小皿の底部外面に描かれたものである。205～207は第10次調査（西加座地区）の溝S D 578から、208は第31～4次調査（牛糞地区）の井戸S E 2000から出土したもので、いずれも目、口、鼻などが表現されるものである。205は額にも一文字が引かれ、女性を表したものであろうか。第10次調査の溝からは、他に平仮名を習書した小皿が多量に出土しており、女官の居住する一郭を示唆するものかもしれない。

残る1点（209）は、第61次調査の井戸S E 4050の最下層から出土したもので、平安時代前期に比定される高杯である。杯部は出土していない。脚高9.2cm、脚幅径12.4cm。脚裾部外面には約10面の粗雑な顔が、また脚柱部には唇と思われるものが描かれている。内面にも額の右半分の大きく丁寧に描かれた目、眉毛、髪の毛、髪がある。あるいは、脚柱部の穴を口と見ることも出来よう。保存状況の違いから内外面共に黒斑の部分にのみ墨跡が残存しており、あるいは本来は裾部内外面の全面に描かれた可能性も多い。

5. ミニチュア土器について

実用の土器を模倣した非常に小堅い土器が35点出土している。時期別には奈良時代6点、奈良時代末期から平安時代前期20点、平安時代中期から末期4点、鎌倉時代2点と、圧倒的に平安時代前半のものが多い。

器種別にみると、奈良時代のものは土師器壺(221・230)、手付鍋(215・220)、鉢(243)、須恵器円面鏡(156)がある。平安時代前半のものには土師器カマド(217)、壺(216・219・227・242)、瓶(222・231)、などの煮沸具、須恵器・灰釉陶器の壺(228・235・236)などの貯蔵具、土師器・須恵器の杯(233・214)、須恵器托(223)など様々な種類がある。平安時代中期から鎌倉時代のものは少なく、羽釜(224・225・238)などの煮沸具が多い。

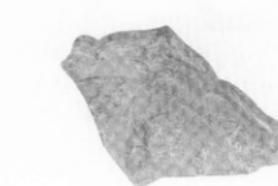
模造のカマド、壺、瓶など煮沸用の道具は竈神祭祀に伴うものと考えられ、8世紀に出現し9~10世紀には消滅するものである。奈良時代末期から平安時代前期のミニチュア土器は、ほぼこれら煮沸用の道具を含み、さらに性格は不明であるが貯蔵具が出土している。奈良時代と平安時代中期から鎌倉時代のものは全体的に少なく、平安時代前半に遺物が集中することや、これらの出土する地域が史跡の東部に集中していることは、遺構の概要でも触れたように、区画溝をはじめ計画的な造営の跡がこの地域には顕著であることと深く関わっているに違いない。

6. 銅製遺物について

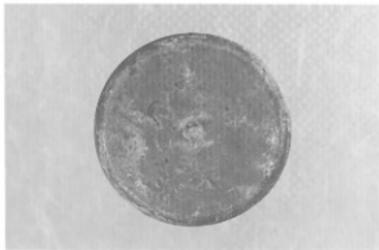
鏡の出土は5点ある。このうち244はくり抜きの井戸棒(図版17上)をもつS E 3260から出土した径4.3cm、厚さ0.5mmの小型の鏡である。鏡背面は鰐かけし、紐を通す鉤が付く。

他の鏡には次のものがある。第23次調査(下園地区)出土の唐鏡(図版12左下)は包含層から出土した。時期は不明である。第50次調査(東裏地区)では平安時代中期の土壙S K 3084から瑞花双鳥八稜鏡の破片が出土した。この鏡は土師器杯・壺・灰釉陶器皿や木棺に使用したと思われる鉄釘などといっしょに出土している。土壙墓の副葬品であろう。

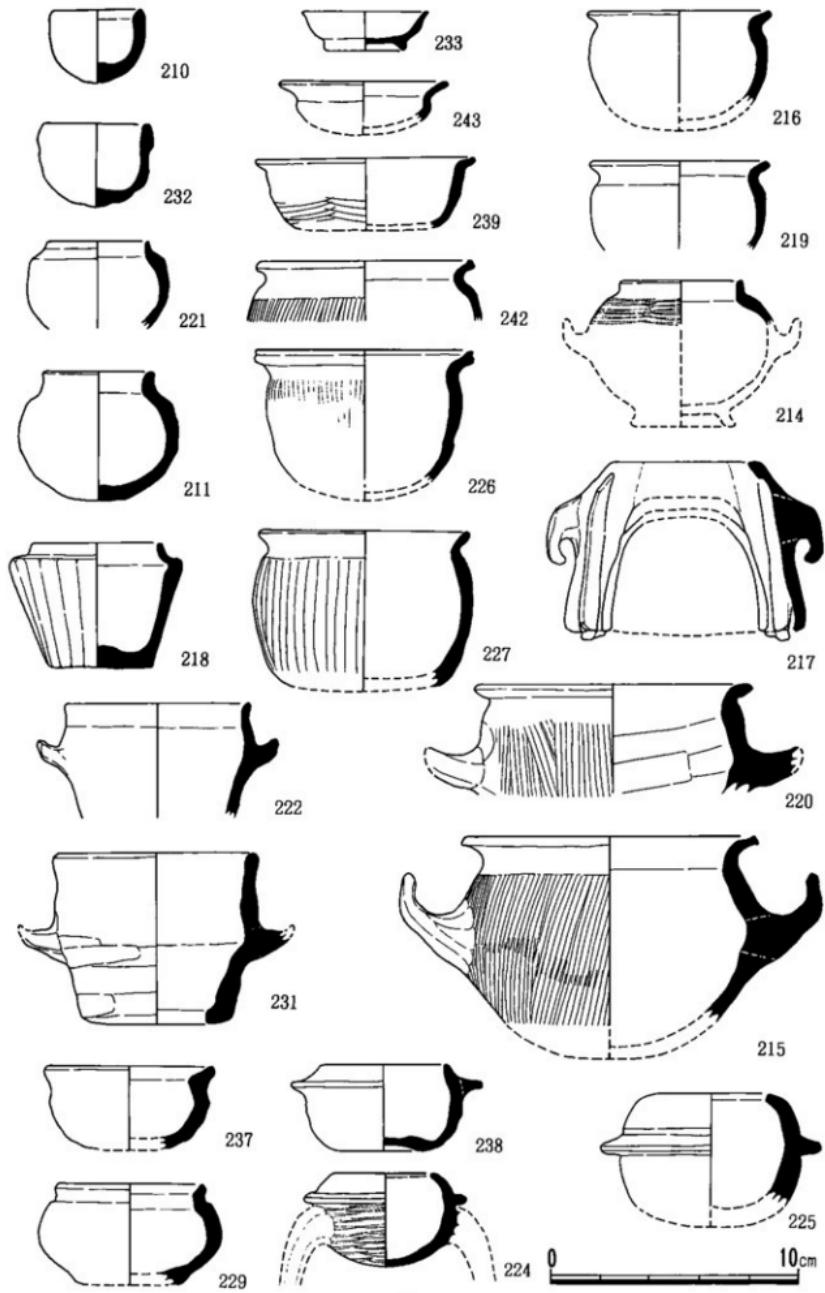
鎌倉時代の和鏡は2点、古里地区的墳墓と思われる土壙から出土した。一つは第7次調査の亀甲文双



第50次調査出土 瑞花双鳥八稜鏡



第5次調査出土 和鏡



雀鏡（図版12右下）で、土師器の鍋と一緒に出土した。もう一つは第5次調査で土師器鍋、小皿、宋銭の破片とともに出土したもので、鏡背文様は2本の草花とその上部に2羽の飛雀、3匹の蝶が描かれている。

鈴の出土は2点ある。第54次調査（西前沖地区）のもの（245）は一体造りで、鉢は一部欠損し真半分に割れた状態で出土した。第57次調査（東加座地区）のもの（246）は分割して造られたものの上半分で、鉢が残っている。

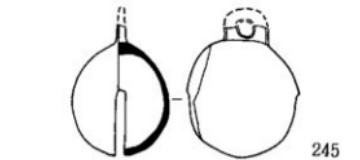
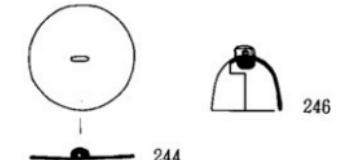
7. 木製遺物について

木製遺物の出土は斎宮跡では極めて稀である。土壙の関係か地表に近い所では残存していない。すべて井戸の中からの出土で、数列しかない。

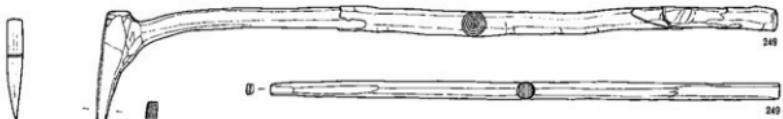
247は舟車の先端部で、第37~4次調査（西前沖地区）の井戸S E2460出土のものである。井戸は、径2mの円形の素掘りで、深さ4.3m。その底近くから曲物の破片と共に出土した。

248は刀形木製品で、第61次調査（西加座地区）のS E4050出土のものである。刀身と柄の境目が不明瞭なもので、刀身は両面から削り、先端は斜めに切り落とし、切先を表現している。柄にあたる部分には^{うや}箋にあたる稜が弱く、平坦なつくりになっている。この井戸の下層からは、他に人面墨書き土器（209）や曲物の破片が7点以上出土している。

他に第62次調査の井戸S E4155の下層からは、横斧の柄・棒状の工具の柄・刀子の柄（249）が出土している。

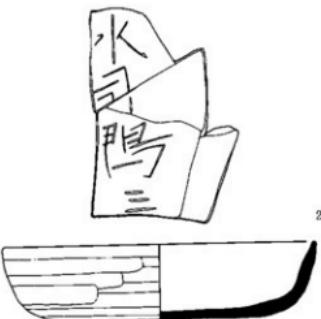


0 10 cm





252



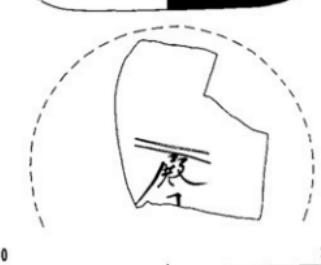
258



253



257



254

0 20 cm

8. 黒書・ヘラ描き土器について

平成元年3月までに確認された黒書土器は529点ある。そのうち判読できるものは漢字108点、平板名12点、習書72点、記号56点の総計248点である。他は墨痕などで現時点では判読できないものである。

主に奈良時代から鎌倉時代までの椀・皿類など食器の底部外面に書かれるものが多く、全体の九割以上を占める。ちなみに器種別の数は土師器杯41点、皿107点、灰釉陶碗46点、山茶碗216点等である。

奈良時代から平安時代中期の黒書土器は漢字を一字ないし二字書き多くのが多く、特に奈良時代後期から平安時代初期のものについては、後述するように斎宮寮13司の役所に関係するものが多く出土している。

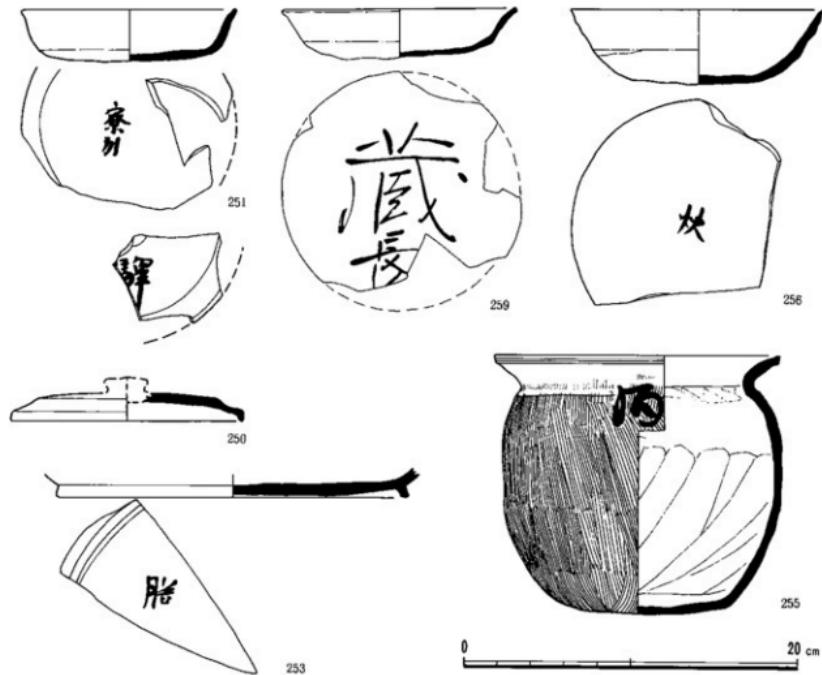
平安時代後期には平板名および平板名習書などが出現し、鎌倉時代のものは、山茶碗の底部外面に「〇・◎・+」というような記号の書かれるものが大半である。なお、平安時代後期の平板名及び平板名習書は第10次調査で多く出土しており、史跡東部の中でも一部の地域に集中するようである。平板名をつくる女官の存在する地域を示すものであろうか。また、鎌倉時代のもののうち古里地区では「熊女（くまめ）」3点、「くま」2点が出土しており、鎌倉時代の女性の名前の一端を示す資料であろう。

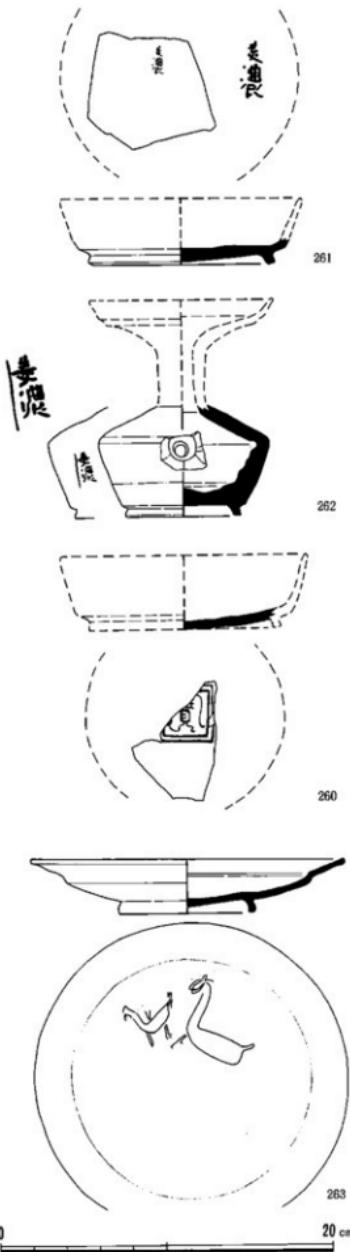
役所名に関係する資料

『類聚三代格』に見られる斎宮寮13司の役所に関する資料には、次ページ略地図に記されているようなものがある。この略図は遺構概要の所で記したように、計画的な造営の行われた史跡東部に推定される区画を表したもので、文字資料は役所名を推定する一つの手がかりとなるものである。

特に13司と関係の深いものには、膳 (253) → 「膳部司」、殿司 (254) → 「殿部司」、酒 (255) → 「酒部司」、藏長 (259) → 「藏部司」、水司 → 「水部司」、炊 (256) → 「炊部司」、駅 (250) → 「駅官院」、などがあり、いずれも奈良時代後期から平安時代初期の土器に書かれている。

なお、この中でも「水部司」の存在を実証し文献資料を裏付けたものとして「水司」(257)、「鴨」の黒書土器、「水司鴨□」(252)、「水司鴨□」(258)





の一連のヘラ描き土器がある。いずれも奈良時代後期の土器で、「宮内省主水司」に歴代関与した鴨氏一族が、斎宮の「水部司」にも任命されていることを示す資料である。

しかし、これら「水司」関係の資料は全て離れた位置で出土していることや、同じ区画内でも他の異なる役所名の書かれた墨書き土器が出土している点を考慮すれば出土場所からただちに役所の位置を決定することは出来ない。

施印土器について

『延喜式』の中には「斎宮の陶器は美濃國が納めよ」という内容が記されている。このことを裏付ける資料として「美濃」という施印土器が2点確認されている。

一つは第43-1次調査（出在家地区）で出土したもので、須恵器杯（261）の底部外面に、他のは史跡の南西部に隣接する金剛板字辰ノ口で採集されたもので、須恵器底（262）の体部外面に施されたものである。

須恵器の生産地については、その技法・形などから推定しているが、「美濃」と施印された土器は奈良時代前期の岐阜市老洞古窯・朝倉古窯など特定の地域・時代で焼かれたものである。老洞古窯の中に斎宮出土のものと同印のものがあり、斎宮に土器の運ばれた確実な資料と言える。

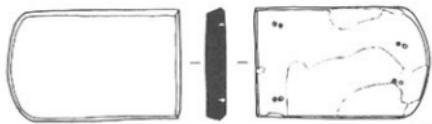
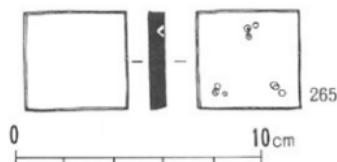
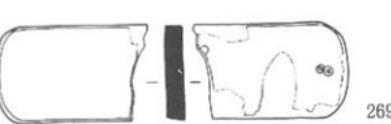
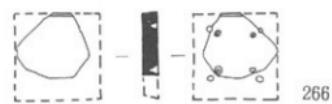
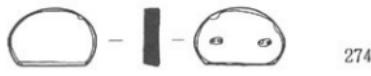
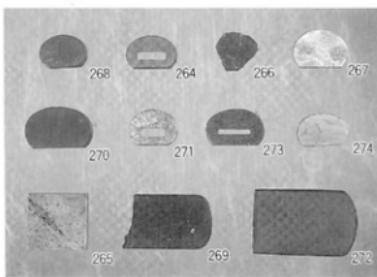
奈良時代の斎宮は不明な点が多く、その全体像については把握されていない。しかし、施印土器が出土している史跡西部はまた奈良時代の遺構が多く分布している。史跡の西部は奈良時代の斎宮を解く鍵となろう。

これら以外の施印土器には第28次調査出土の「寶」（260）がある。奈良時代の須恵器の杯底部外面に施されるもので、その生産地及び意味については不明である。また、第8-4次調査の灰釉陶器（263）の内面にはヘラで絵画が描かれるものもある。鹿もしくは馬と鳥であろうか。

9. 石 帯

707年以後、律令制下の貴族・官人たちが着用した革帯には銅製の飾り金具が付いていた。やがて銅素材の不足により、その代用として石帶が用いられるようになった。その時期は、796年から807年までの間と810年以降の2段階に分かれると言われている。

奈宮跡では石帶の邊方2点(265・266)、丸納7点(264・267・268・270・271・273・274)、鈍尾2点(269・272)が出土している。いずれもかがり穴を使って針金や糸で革帯に着装する。いわゆるD類(阿部義平氏の分類)に属する。



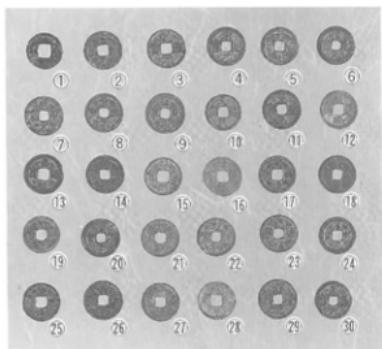
0 10 cm

10. 古銭について

第54次調査のSK3515から多量の古銭が一括して出土した。この土坑は、径0.7×0.45mの楕円形を呈し、深さ0.3mである。古銭は97枚前後を1単位としたいわゆる差銭の状態で約119通確認され、総数11,571枚に達した。底部の差銭には布目压痕が付着しており、布袋に納められていたものであろう。出土中最も新しい古銭(1310年)から、鎌倉時代後期以降に埋納されたと推定できる。現在までに判読されたものは以下に記す30種類である。



第54次調査 SK3515古銭出土状況



この写真番号は文章中の番号と一致する

| 錢貨名 | 初鑄造年 |
|--------|---------|
| ① 五 銖 | 漢 BC118 |
| ② 開元通宝 | 唐 AD621 |
| ③ 乾元重宝 | タ 758 |
| ④ 宋通元宝 | 宋 960 |
| ⑤ 太平通宝 | タ 976 |
| ⑥ 淳化元宝 | タ 990 |
| ⑦ 咸平元宝 | タ 998 |
| ⑧ 景德元宝 | タ 1004 |
| ⑨ 祥符元宝 | タ 1008 |
| ⑩ 天禧通宝 | タ 1017 |
| ⑪ 天聖元宝 | タ 1023 |
| ⑫ 皇宋通宝 | タ 1038 |
| ⑬ 嘉祐元宝 | タ 1056 |
| ⑭ 治平元宝 | タ 1064 |
| ⑮ 熙寧元宝 | タ 1068 |
| ⑯ 元豐通宝 | タ 1078 |
| ⑰ 元祐通宝 | タ 1086 |
| ⑱ 超聖元宝 | タ 1094 |
| ⑲ 元符通宝 | タ 1098 |
| ⑳ 懿宋通宝 | タ 1101 |
| ㉑ 大觀通宝 | タ 1107 |
| ㉒ 政和通宝 | タ 1111 |
| ㉓ 宣和通宝 | タ 1119 |
| ㉔ 淳熙元宝 | 南宋 1174 |
| ㉕ 慶元通宝 | タ 1195 |
| ㉖ 嘉定通宝 | タ 1208 |
| ㉗ 超定通宝 | タ 1228 |
| ㉘ 咸淳元宝 | タ 1265 |
| ㉙ 正隆元宝 | 金 1157 |
| ㉚ 至大通宝 | 元 1310 |

特殊遺物一覧表（一）

| 通し番号 | 種別番号 | 調査次 | 出土遺構 | 器種 | 時期 | 備考 | 図版番号 | 参考頁 | 文書番号 |
|------|------|------|----------|-------|--------|------|------|-----|--------|
| 1 | 1 | 8-4 | S K 190 | 綠釉：壺 | 平安後 I | | 5 | 10 | 8·9·10 |
| 2 | 2 | 61 | S E 4050 | 綠釉：小壺 | 平安前 | | 6 | 10 | 24 |
| 3 | 3 | 44 | S K 2650 | 綠釉：耳皿 | 平安前 II | | 6 | 10 | 17 |
| 4 | 4 | 44 | S K 2650 | 綠釉：椀 | 平安前 II | | 6 | 10 | 17 |
| 5 | 5 | 42 | S E 2622 | 綠釉：椀 | 平安前 | | 6 | 10 | 17 |
| 6 | 6 | 31-4 | S E 2000 | 綠釉：椀 | 平安後 I | | 6 | 10 | 15 |
| 7 | 7 | 57 | S K 3700 | 灰釉：鉢 | 平安前 II | 陰刻花文 | 7 | 10 | 22 |
| 8 | 8 | 61 | S E 4050 | 灰釉：壺 | 平安前 | | 7 | 10 | 24 |
| 9 | 9 | 10 | 包含層 | 綠釉：陶枕 | | | 4 | 12 | 11 |
| 10 | 10 | 10 | 包含層 | 綠釉：陶枕 | | | 4 | | 11 |

緑釉陰刻花文陶器

| | | | | | | | | | |
|----|----|-------|-------|-----|--------|--|---|----|--------|
| 11 | 1 | 2 | 包含層 | | | | 4 | 11 | 2 |
| 12 | 2 | 6-4 | 包含層 | | | | | | 7·10 |
| 13 | 3 | 7 | 包含層 | 椀 | | | 4 | 11 | 8 |
| 14 | 4 | 8-1 | S D | | | | | | 8·9·10 |
| 15 | 5 | 8-4 | S E | | | | | | 8·9·10 |
| 16 | 6 | 8-9 | S K | | | | | | 8·10 |
| 17 | 7 | 8-9 | 包含層 | | | | | | 8·10 |
| 18 | 8 | 8-9 | P I T | | | | | | 8·10 |
| 19 | 9 | 8-9 | 包含層 | | | | | | 8·10 |
| 20 | 10 | 8-9 | S D | | | | | | 8·10 |
| 21 | 11 | 8-9 | S K | | | | | | 8·10 |
| 22 | 12 | 8-10 | 包含層 | | | | | | 8·10 |
| 23 | 13 | 8-10 | S D | 棱 楓 | | | | | 8·10 |
| 24 | 14 | 8-10 | S D | | | | | | 8·10 |
| 25 | 15 | 8-10 | S D | | | | | | 8·10 |
| 26 | 16 | 8-10 | S D | | | | | | 8·10 |
| 27 | 17 | 8-10 | P I T | | | | | | 8·10 |
| 28 | 18 | 9-1 | S D | | | | 4 | 11 | 10 |
| 29 | 19 | 9-1 | 包含層 | | 平安前 | | | | 10 |
| 30 | 20 | 9-8 | 包含層 | | | | | | 10 |
| 31 | 21 | 9-10 | 包含層 | | | | | | 10 |
| 32 | 22 | 13-12 | P I T | 棱 楓 | 平安前 II | | | | |
| 33 | 23 | 19 | S K | | | | | | 13 |
| 34 | 24 | 19 | S K | | | | | | 13 |
| 35 | 25 | 19 | S K | | | | 4 | 11 | 13 |
| 36 | 26 | 20 | 包含層 | | | | | | 13 |
| 37 | 27 | 20 | 包含層 | | | | | | 13 |
| 38 | 28 | 20 | P I T | | | | | | 13 |
| 39 | 29 | 20 | P I T | | | | | | 13 |
| 40 | 30 | 21-5 | 包含層 | | | | | | 13 |
| 41 | 31 | 28 | 包含層 | | | | | | 14 |
| 42 | 32 | 29 | P I T | | | | | | 14 |
| 43 | 33 | 29 | S K | | | | | | 14 |
| 44 | 34 | 29 | 包含層 | | | | | | 14 |
| 45 | 35 | 34 | 包含層 | | | | | | 15 |
| 46 | 36 | 34 | 包含層 | | | | | | 15 |
| 47 | 37 | 34 | S D | | | | | | 15 |
| 48 | 38 | 34 | 包含層 | | | | | | 15 |

特殊遺物一覧表（二）

| 通し番号 | 種別番号 | 調査次 | 査数 | 出土遺構 | 器種 | 時期 | 備考 | 国番号 | 版号 | 参考頁 | 文番號 |
|------|------|-------|----|----------|-----|------|----|-----|----|-----|-------|
| 49 | 39 | 34 | | P I T | | | | | | | 15 |
| 50 | 40 | 40 | | S D | | | | 4 | 11 | | 16 |
| 51 | 41 | 40 | | 包含層 | | | | | | | 16 |
| 52 | 42 | 44 | | S K 1424 | 蓋 | 平安前Ⅰ | | 3 | 11 | | 17 |
| 53 | 43 | 44 | | S K 1424 | 蓋 | 平安前Ⅰ | | 3 | 11 | | 17 |
| 54 | 44 | 44 | | S K 2695 | 蓋 | 平安前Ⅱ | | | | | 17 |
| 55 | 45 | 44 | | S K 2650 | 蓋 | 平安前Ⅱ | | | | | 17 |
| 56 | 46 | 44 | | S K 2650 | | 平安前Ⅱ | | 4 | 11 | | 17 |
| 57 | 47 | 44 | | S K 2650 | 椀 | 平安前Ⅱ | | | | | 17 |
| 58 | 48 | 44 | | S K 2650 | 皿 | 平安前Ⅱ | | 2 | 11 | | 17 |
| 59 | 49 | 44 | | S K 2650 | 椀 | 平安前Ⅱ | | 1 | 11 | | 17 |
| 60 | 50 | 47 | | P I T | | 平安前 | | | | | 17 |
| 61 | 51 | 51 | | 包含層 | | 平安前 | | 4 | 11 | | 18 |
| 62 | 52 | 51 | | S K 3185 | | 平安前Ⅱ | | | | | 18 |
| 63 | 53 | 51 | | S K 3185 | | 平安前Ⅱ | | | | | 18 |
| 64 | 54 | 51 | | S K 3185 | | 平安前Ⅱ | | | | | 18 |
| 65 | 55 | 51 | | S K 3190 | 棱 楓 | 平安前Ⅱ | | | | | 18 |
| 66 | 56 | 51 | | S K 3187 | | 平安前Ⅱ | | | | | 18 |
| 67 | 57 | 51 | | S K 3185 | | 平安前Ⅱ | | | | | 18 |
| 68 | 58 | 51 | | S K 3185 | 椀 | 平安前Ⅱ | | | | | 18 |
| 69 | 59 | 52 | | 包含層 | | | | | | | 18 |
| 70 | 60 | 54 | | P I T | | | | | | | 22 |
| 71 | 61 | 54 | | 包含層 | | | | | | | 22 |
| 72 | 62 | 54 | | P I T | | | | | | | 22 |
| 73 | 63 | 59 | | 包含層 | | | | | | | 24 |
| 74 | 64 | 60 | | 包含層 | | | | | | | 24 |
| 75 | 65 | 60 | | P I T | | | | | | | 24 |
| 76 | 66 | 61 | | S E 4050 | | 平安前 | | | | | 24 |
| 77 | 67 | 61 | | 包含層 | | | | | | | 24 |
| 78 | 68 | 62 | | S K 4133 | | 平安前Ⅱ | | | | | 24 |
| 79 | 69 | 63 | | P I T | | | | | | | 24 |
| 80 | 70 | 66 | | 包含層 | | | | | | | 26 |
| 81 | 71 | 66 | | S K 4415 | 皿 | 平安前Ⅱ | 蝶文 | 3 | 11 | | 26 |
| 82 | 72 | 70-15 | | P I T | | 平安前 | | | | | 28-29 |
| 83 | 73 | 78 | | 包含層 | | 平安前 | | | | | 30 |

二 彩陶器

| | | | | | | | | | | | |
|----|----|------|----------|---|--|------|--|---|----|--|--------|
| 84 | 1 | 7 | S K | | | | | | | | 8 |
| 85 | 2 | 8-1 | 包含層 | | | | | | | | 8-9-10 |
| 86 | 3 | 8-3 | S K | | | | | | | | 8-9-10 |
| 87 | 4 | 8-5 | 包含層 | | | | | | | | 8-10 |
| 88 | 5 | 8-5 | 包含層 | 椀 | | | | | | | 8-10 |
| 89 | 6 | 8-10 | S D | | | | | | | | 8-10 |
| 90 | 7 | 20 | P I T | | | | | | | | 13 |
| 91 | 8 | 20 | P I T | | | | | | | | 13 |
| 92 | 9 | 44 | S K 2650 | | | 平安前Ⅱ | | | | | 17 |
| 93 | 10 | 44 | S K 2650 | 椀 | | 平安前Ⅱ | | 4 | 12 | | 17 |
| 94 | 11 | 44 | S K 2650 | | | 平安前Ⅱ | | | | | 17 |
| 95 | 12 | 44 | S K 2650 | | | 平安前Ⅱ | | | | | 17 |
| 96 | 13 | 44 | S K 2650 | 椀 | | 平安前Ⅱ | | 4 | 11 | | 17 |

特殊遺物一覧表（三）

| 通し番号 | 種別番号 | 調査数 | 出土遺構 | 器種 | 時期 | 備考 | 図版番号 | 参考頁 | 文番號 |
|------|------|-----|----------|----|------|----|------|-----|-----|
| 97 | 14 | 44 | S K 2650 | | 平安前Ⅱ | | | | 17 |
| 98 | 15 | 45 | 包含層 | | | | 4 | 11 | 17 |
| 99 | 16 | 54 | 包含層 | 椀 | | | | | 22 |
| 100 | 17 | 60 | 包含層 | | | | | | 24 |
| 101 | 18 | 60 | P I T | | | | | | 24 |
| 102 | 19 | 60 | P I T | | | | | | 24 |
| 103 | 20 | 60 | P I T | | | | | | 24 |

三 彩 陶 器

| | | | | | | | | | |
|-----|---|----|----------|-------|-----|--|---|----|----|
| 104 | 1 | 30 | S K | 短頸壺胴部 | 奈良 | | 4 | | 15 |
| 105 | 2 | 30 | 包含層 | 短頸壺胴部 | 奈良 | | 4 | | 15 |
| 106 | 3 | 30 | S B 1643 | 短頸壺口縁 | 奈良 | | 4 | | 15 |
| 107 | 4 | 30 | S D | 短頸壺蓋部 | 奈良 | | | | 15 |
| 108 | 5 | 71 | S K 4750 | 小壺底部 | 奈良後 | | 4 | 12 | 28 |

踏 脚 観

| | | | | | | | | | |
|-----|---|---|-----|---|----|--|---|-------|-----|
| 109 | 1 | 3 | 包含層 | 脚 | 奈良 | | | | 2 |
| 110 | 2 | 5 | 包含層 | 脚 | 奈良 | | 8 | 13-14 | 5-6 |

円 脚 観

| | | | | | | | | | |
|-----|----|-------|----------|-------|-------|-------|---|-------|--------|
| 111 | 1 | 4 | S K | 脚 | | 方形スカシ | | 14 | 3-4 |
| 112 | 2 | 4 | 包含層 | 陸・海 | | 方形スカシ | | 14 | 3-4 |
| 113 | 3 | 5 | 包含層 | 脚 | | 方形スカシ | | 14 | 5-6 |
| 114 | 4 | 8-4 | 包含層 | 脚 | | 方形スカシ | | 14 | 8-9-10 |
| 115 | 5 | 8-4 | S E 178 | 脚 | | 方形スカシ | | 14 | 8-9-10 |
| 116 | 6 | 8-8 | 包含層 | 脚 | | ヘラ | | | 8-10 |
| 117 | 7 | 8-9 | 包含層 | 陸・海・脚 | | ヘラ | | | 8-10 |
| 118 | 8 | 8-9 | 包含層 | 脚 | | ヘラ | | | 8-10 |
| 119 | 9 | 8-9 | S D | 陸・海 | | ヘラ | | 14 | 8-10 |
| 120 | 10 | 8-10 | 包含層 | 脚 | | ヘラ | | | 8-10 |
| 121 | 11 | 8-10 | 包含層 | 海・脚 | | ヘラ | | 14 | 8-10 |
| 122 | 12 | 8-10 | 包含層 | 脚 | | ヘラ | | | 8-10 |
| 123 | 13 | 9-2 | 包含層 | 脚 | | 方形スカシ | | | 10 |
| 124 | 14 | 10 | 包含層 | 陸・海・脚 | | ヘラ | | 14 | 11 |
| 125 | 15 | 12-3 | 包含層 | 陸・海・脚 | | ヘラ | 8 | 13-14 | 10 |
| 126 | 16 | 19 | 包含層 | 脚 | | ヘラ | | | 13 |
| 127 | 17 | 19 | S K 987 | 脚 | | ヘラ | | | 13 |
| 128 | 18 | 19 | 包含層 | 脚 | | ヘラ | | | 13 |
| 129 | 19 | 19 | 包含層 | 陸・海・脚 | | ヘラ | | 14 | 13 |
| 130 | 20 | 19 | 包含層 | 陸・海・脚 | | ヘラ | 8 | 13-14 | 13 |
| 131 | 21 | 23 | P I T | 脚 | | 方形スカシ | | | 14 |
| 132 | 22 | 29 | P I T | 陸・海 | | | | | 14 |
| 133 | 23 | 29 | S K 1445 | ほぼ完形 | 平安初 | 方形スカシ | 8 | 13-14 | 14 |
| 134 | 24 | 30 | 包含層 | 陸・海 | | 方形スカシ | | | 15 |
| 135 | 25 | 30 | 包含層 | 脚 | | 方形スカシ | | | 15 |
| 136 | 26 | 38 | S K 2211 | 陸・海・脚 | 奈良 | 無 | 8 | 13-14 | 16 |
| 137 | 27 | 38 | 包含層 | 陸・海 | | | | | 16 |
| 138 | 28 | 46 | 包含層 | 海・脚 | | ヘラ | | 14 | 17 |
| 139 | 29 | 46 | 包含層 | 陸・海 | | ヘラ | | | 17 |
| 140 | 30 | 48-11 | S B 3340 | 陸・海・脚 | 奈良後 | 方形スカシ | | 14 | 18-19 |
| 141 | 31 | 50 | S K 3066 | 脚 | | 方形スカシ | | 14 | 18 |
| 142 | 32 | 51 | S K 3137 | 陸・海・脚 | 奈良-平初 | ヘラ | | 14 | 18 |

特殊遺物一覧表 (四)

| 通し番号 | 種別番号 | 調査次 | 査数 | 出土遺構 | 器種 | 時期 | 備考 | 国番 | 版号 | 参照頁 | 文番號 |
|------|------|-------|----|----------|-------|-------|----------|------|----------------|-------|-----|
| 143 | 33 | 55 | | S K 3557 | 海・脚 | 平安初 | ハラ | | 14 | 22 | |
| 144 | 34 | 55 | | S K | 脚 | | 方形スカシ | | | 22 | |
| 145 | 35 | 57 | | S K 3720 | 1/2残 | 奈末～平初 | ハラ | | 14 | 22 | |
| 146 | 36 | 57 | | 包含層 | 脚 | | 方形スカシ | | | 22 | |
| 147 | 37 | 61 | | 包含層 | 脚 | | ハラ | | | 24 | |
| 148 | 38 | 63 | | 包含層 | 陸・海・脚 | | ハラ | | 14 | 24 | |
| 149 | 39 | 64-12 | | 包含層 | 脚 | | 方形スカシ | | | 26-27 | |
| 150 | 40 | 65-3 | | 包含層 | 脚 | | 方形スカシ | | | 26 | |
| 151 | 41 | 66 | | S K | 脚 | | ハラ | | | 26 | |
| 152 | 42 | 69 | | P I T | 陸・海 | | ハラ | | 14 | 26 | |
| 153 | 43 | 70-1 | | S K 5102 | 陸・海 | 奈良前 | 方形二段スカシ | 8 | 13-14 | 28-29 | |
| 154 | 44 | 77 | | S K | | | ハラ | | | 30 | |
| 155 | 45 | 79 | | S D 4335 | 陸・海 | | 方形スカシ：ミニ | | | 30 | |
| 156 | 46 | 79 | | S K 5340 | 陸・海 | 平安前I | 方形スカシ：ミニ | 8-13 | 13-14 19-21 | 30 | |

風字観

| | | | | | | | | | | | |
|-----|----|------|----------|---|---|-------|---------|---|----|--------|--|
| 157 | 1 | 6-1 | 包含層 | 灰 | 軸 | | | 9 | 14 | 7-10 | |
| 158 | 2 | 8-4 | S K 190 | 綠 | 軸 | 平安後I | | 4 | 12 | 8-9-10 | |
| 159 | 3 | 12-1 | S K 410 | 黒 | 色 | | | 9 | 14 | 10 | |
| 160 | 4 | 20 | S K 1045 | 灰 | 軸 | 平安前I | | 9 | 14 | 13 | |
| 161 | 5 | 23 | 包含層 | 灰 | 軸 | | | | | 14 | |
| 162 | 6 | 44 | S K 1424 | 黒 | 色 | 平安前I | | | | 17 | |
| 163 | 7 | 44 | S K 1424 | 黒 | 色 | 平安前I | | | | 17 | |
| 164 | 8 | 44 | S K 2650 | 黒 | 色 | 平安前II | | | 14 | 17 | |
| 165 | 9 | 44 | S K 2650 | 黒 | 色 | 平安前II | | | | 17 | |
| 166 | 10 | 46 | S D 2799 | 灰 | 軸 | | | | | 17 | |
| 167 | 11 | 59 | 包含層 | 須 | 恵 | | | | | 24 | |
| 168 | 12 | 60 | 包含層 | 灰 | 軸 | | | | 14 | 24 | |
| 169 | 13 | 61 | 包含層 | 黒 | 色 | | | | | 24 | |
| 170 | 14 | 69 | 包含層 | 灰 | 軸 | | | | | 26 | |
| 171 | 15 | 70-3 | S K | 須 | 恵 | | 二面円頭風字観 | | 14 | 28-29 | |
| 172 | 16 | 75 | S K | 灰 | 軸 | 平安前I | | | 14 | 28 | |

猿面観：形象硯

| | | | | | | | | | | | |
|-----|---|----|----------|--------|------|-------|--|---|----|----|--|
| 173 | 1 | 59 | S D 3890 | 須恵：猿面 | 平安後I | | | 9 | 15 | 24 | |
| 174 | 2 | 59 | 包含層 | 須恵：猿面 | | | | | 15 | 24 | |
| 175 | 3 | 75 | S K 5083 | 須恵：鳥形蓋 | 奈良後 | 鳥形硯の蓋 | | | 15 | 28 | |

石観

| | | | | | | | | | | | |
|-----|---|------|----------|-----|------|--|--|----|----|-------|--|
| 176 | 1 | 3 | S K | 椿円硯 | 室町 | | | 9 | 15 | 2 | |
| 177 | 2 | 64-2 | S K 4630 | 椿円硯 | 室町 | | | 10 | 17 | 26-27 | |
| 178 | 3 | 72-2 | S D | 椿円硯 | 鎌倉前半 | | | | | 28 | |
| 179 | 4 | 76-2 | S D | | | | | | 15 | 30-31 | |

土馬

| | | | | | | | | | | | |
|-----|---|-----|-----|--------|----|-------|--|----|----|------|--|
| 180 | 1 | 3 | 包含層 | 左後脚欠 | 奈良 | ハリ | | 10 | 17 | 2 | |
| 181 | 2 | 3 | 包含層 | 頬左脚欠 | 奈良 | ハリ | | 10 | 17 | 2 | |
| 182 | 3 | 3 | 包含層 | 胴後～尾残 | 奈良 | ハリ | | | | 2 | |
| 183 | 4 | 3 | S D | 頭・脚・尾欠 | 奈良 | ハリ | | | | 2 | |
| 184 | 5 | 3 | S D | 頬・脚欠 | 奈良 | ハリ：朱彩 | | 10 | 17 | 2 | |
| 185 | 6 | 4 | S D | 頭・脚・尾欠 | 奈良 | ハリ：ヘラ | | | 17 | 3-4 | |
| 186 | 7 | 4 | 包含層 | 口耳脚尾欠 | 奈良 | ハリ：ヘラ | | | 17 | 3-4 | |
| 187 | 8 | 8-6 | 包含層 | 頭部のみ残 | 奈良 | | | | 17 | 8-10 | |

特殊遺物一覧表(五)

| 通し番号 | 種別番号 | 調査次 | 査数 | 出土遺構 | 器種 | 時期 | 備考 | 図版番号 | 版照 | 文書番号 |
|------|------|------|----------|--------|-----|----|----|------|-------|------|
| 188 | 9 | 29 | S K 1486 | 尾部のみ残 | 平安前 | | | 17 | 14 | |
| 189 | 10 | 33 | 包含層 | 頭部のみ残 | | | | 17 | 15 | |
| 190 | 11 | 38 | S K 2187 | 脚のみ残 | 平安前 | | | | 16 | |
| 191 | 12 | 39 | S B 2235 | 脚のみ残 | 飛鳥 | | | | 16 | |
| 192 | 13 | 39 | 包含層 | 尾部のみ残 | | | | | 16 | |
| 193 | 14 | 41 | 包含層 | 頭部のみ残 | | | | 17 | 16 | |
| 194 | 15 | 49 | S D 170 | 頭・脚・尾欠 | 奈良前 | ハリ | | | 18 | |
| 195 | 16 | 50 | 包含層 | 脚のみ残 | | | | | 18 | |
| 196 | 17 | 53-4 | 包含層 | 頭・尾残 | | | | | 22-23 | |
| 197 | 18 | 59 | 包含層 | 尾部のみ残 | | | ハリ | | 24 | |
| 198 | 19 | 63 | S D 2357 | 頭・脚・尾欠 | | | | 17 | 24 | |
| 199 | 20 | 63 | 包含層 | 頭部のみ残 | | | | 17 | 24 | |
| 200 | 21 | 72-2 | 包含層 | 背カ? | | | | | 28 | |
| 201 | 22 | 74-2 | P I T | 脚カ? | | | | | 28 | |
| 202 | 23 | 80 | S E 5380 | 頭部のみ残 | 平安前 | | | | 17 | 30 |
| 203 | 24 | 80 | S D 2340 | 脚カ? | | | | | | 30 |
| 204 | 25 | 80 | S D 2340 | 脚部のみ残 | | | | | | 30 |

人面墨書き土器

| | | | | | | | | | | |
|-----|---|------|------------|-------|-----|--|--|----|----|----|
| 205 | 1 | 10 | S D 578 | 土師：皿 | 平安後 | | | 11 | 18 | 11 |
| 206 | 2 | 10 | S D 578 | 土師：皿 | 平安後 | | | 12 | 18 | 11 |
| 207 | 3 | 10 | S D 578 | 土師：皿 | 平安後 | | | 12 | 18 | 11 |
| 208 | 4 | 31-4 | S E 2000 | 土師：皿 | 平安後 | | | | 18 | 15 |
| 209 | 5 | 61 | S E 4050下層 | 土師：高杯 | 平安前 | | | 11 | 18 | 24 |

ミニチュア土器

| | | | | | | | | | | |
|-----|----|-------|----------|--------|-------|------------|-------|-------|----------|--|
| 210 | 1 | 8-9 | 包含層 | 土師：マリ | | 径3.6 高3.0 | | 20 | 8-10 | |
| 211 | 2 | 9-4 | P I T | 土師：壺 | 平安 | 径4.5 高5.15 | | 20 | 10 | |
| 212 | 3 | 15 | S D | 須恵：壺 | | 径5.6 高6.2 | | 21 | 21 | |
| 213 | 4 | 37-3 | S B 2531 | 土師：葉壺 | 平安前Ⅰ | 径4.8 | | 20 | 16 | |
| 214 | 5 | 37-13 | S B 2490 | 須恵：杯 | 平安前Ⅰ | 径4.0 高1.8 | 13-18 | 19-21 | 16 | |
| 215 | 6 | 38 | S K 2199 | 土師：手付鍋 | 奈良 | 径13.0 | | 20 | 16 | |
| 216 | 7 | 44 | S K 1425 | 土師：カメ | 平安前 | 径7.2 | 13-18 | 19-20 | 17 | |
| 217 | 8 | 44 | S K 1415 | 土師：カマド | 平安前 | 径6.0 高7.0 | 13-18 | 19-20 | 17 | |
| 218 | 9 | 44 | S K 2706 | 土師：壺 | 平安前 | 径5.2 高5.0 | | 20 | 17 | |
| 219 | 10 | 44 | S K 1445 | 土師：カメ | 平安前Ⅰ | 径6.9 | | 20 | 17 | |
| 220 | 11 | 48-1 | S K 2953 | 土師：鍋 | 奈良前 | 径10.7 | 13 | 19-20 | 18-19-21 | |
| 221 | 12 | 50 | S B 3065 | 土師：壺? | 奈良 | 径3.8 | 13-18 | 19-20 | 18 | |
| 222 | 13 | 51 | S K 3187 | 土師：甌 | 平安前 | 径7.4 | 13 | 19-20 | 18 | |
| 223 | 14 | 52 | S E 3260 | 須恵：托 | 平安前 | 径3.8 | 13-18 | 19-21 | 18 | |
| 224 | 15 | 54 | S D 1900 | 土師：三足鍋 | 平安末 | 径4.2 高3.6 | 13 | 19-20 | 22 | |
| 225 | 16 | 54 | S B 3469 | 黒色：羽釜 | 平安末 | 径4.5 | 13 | 19-20 | 22 | |
| 226 | 17 | 55 | S K 3555 | 土師：カメ | 平安初 | 径8.8 | | 20 | 22 | |
| 227 | 18 | 57 | S K 3720 | 土師：カメ | 奈良～平初 | 径8.6 | 13 | 19-20 | 22 | |
| 228 | 19 | 57 | 包含層 | 須恵：壺 | 平安前 | 径5.7 高4.6 | | 21 | 22 | |
| 229 | 20 | 59 | S D 3890 | 黒色：壺 | 平安後Ⅰ | 径5.8 高4.2 | 13 | 19-20 | 24 | |
| 230 | 21 | 59 | S B 3915 | 土師：短頸壺 | 奈良 | 径5.8 | | | 24 | |
| 231 | 22 | 61 | S K 4060 | 土師：甌 | 平安前 | 径8.0 高5.9 | 13-18 | 19-20 | 24 | |
| 232 | 23 | 62 | S K 4129 | 土師：マリ | 平安前Ⅱ | 径4.0 高3.4 | 13 | 19-20 | 24 | |
| 233 | 24 | 63 | S K 4224 | 土師：杯 | 平安初 | 径5.0 高1.4 | 13-18 | 19-20 | 24 | |
| 234 | 25 | 64-4 | S D 4680 | 土師：カメ | 平中～後Ⅰ | | | | 26・27 | |

特殊遺物一覧表(六)

| 通し番号 | 種別番号 | 調査次 | 査数 | 出土遺構 | 器種 | 時期 | 備考 | 国番 | 版号 | 参考頁 | 文番号 |
|------|------|------|----|----------|--------|-------|-----------------|-------|-------------|-------|-----|
| 235 | 26 | 66 | | 包含層 | 灰釉:壺 | 平安前 | 径2.2 高3.7 底径2.8 | 13-18 | 19-21 | 26 | |
| 236 | 27 | 66 | | 包含層 | 須恵:壺 | 平安前 | 径3.6 高3.4 底径3.4 | 13 | 19-21 | 26 | |
| 237 | 28 | 68 | | S K 4522 | 土師:壺 | 鎌倉前 | 径6.6 高3.5 | | 20 | 26 | |
| 238 | 29 | 68 | | S D 4540 | 土師:鍋 | 鎌倉後 | 径5.0 高3.5 | 13 | 19-20 | 26 | |
| 239 | 30 | 70-1 | | 包含層 | 土師:鉢 | | 径8.9? 高2.9 | | 20 | 28-29 | |
| 240 | 31 | 75 | | S K | 土師:鍋 | 奈良 | | 13 | 19 | 30 | |
| 241 | 32 | 77 | | 包含層 | 灰釉:壺 | 平安 | | | 20 | 30 | |
| 242 | 33 | 78 | | S K 5265 | 土師:カメ | 平安前Ⅱ | 径8.0 | | 20 | 30 | |
| 243 | 34 | 78 | | S K 5266 | 土師:鉢 | 奈良中~後 | 径6.2 | | 20 | 30 | |
| 156 | 35 | 79 | | S K 5340 | 須恵:円面鏡 | 奈良後 | 径3.8 | 8-13 | 13-14-19-21 | 30 | |

銅製品

| | | | | | | | | | | |
|-----|---|----|----------|----|-----|----------|----|----|----|--|
| 244 | 1 | 52 | S E 3260 | 儀鏡 | 平安前 | 完形 | 12 | 21 | 18 | |
| 245 | 2 | 54 | P I T | 銅鏡 | 平安 | 半分 | 12 | 21 | 22 | |
| 246 | 3 | 57 | S D | 銅鏡 | 平安 | ほぼ完形・珠なし | 12 | 21 | 22 | |

木製品

| | | | | | | | | | | |
|-----|---|------|----------|-----------------|-------|--|----|----|-------|--|
| 247 | 1 | 37-4 | S E 2460 | 舟串 | 平安前Ⅱ | | 17 | 21 | 16-20 | |
| 248 | 2 | 61 | S E 4050 | 刀形 | 平安前 | | | 21 | 24 | |
| 249 | 3 | 62 | S E 4155 | 横刃・刀子・その他の工具類の柄 | 奈良~平初 | | 17 | 21 | 24 | |

墨書:ヘラ書き:印など

| | | | | | | | | | | |
|-----|----|------|----------|--------|-------|-----------|----|----|--------|--|
| 250 | 1 | 24 | 包含層 | 須恵:杯蓋上 | 平安前 | 墨書:驛 | 14 | 23 | 14 | |
| 251 | 2 | 34 | S K 1862 | 土師:杯底外 | 平安前 | 墨書:寮口 | 15 | 23 | 15 | |
| 252 | 3 | 37-4 | S K 2450 | 土師:杯底外 | 奈良後 | ヘラ:水司鴨口 | 14 | 22 | 16-20 | |
| 253 | 4 | 46 | S K 2798 | 須恵:皿底外 | 奈良~平初 | 墨書:膳 | 14 | 23 | 17 | |
| 254 | 5 | 57 | S K 3730 | 土師:杯底外 | 奈良~平初 | 墨書:般司 | 14 | 22 | 22 | |
| 255 | 6 | 69 | S E 4580 | 土師:カメ外 | 奈良後 | 墨書:酒 | 15 | 23 | 26 | |
| 256 | 7 | 69 | S K 4606 | 土師:杯底外 | 平安前Ⅰ | 墨書:炊 | 23 | 26 | | |
| 257 | 8 | 75 | 包含層 | 土師:杯底外 | 奈良後 | 墨書:水司 | 14 | 22 | 28 | |
| 258 | 9 | 82 | 包含層 | 土師:皿底外 | 奈良後 | ヘラ:水司鴨口 | 14 | 22 | | |
| 259 | 10 | 82 | 包含層 | 土師:皿底外 | 平安前Ⅱ | 墨書:藏長 | 15 | 23 | | |
| 260 | 11 | 28 | S K 1370 | 須恵:杯底外 | 奈良 | 施印:寶 | 19 | 24 | 14 | |
| 261 | 12 | 43-1 | 包含層 | 須恵:杯底外 | 奈良 | 施印:美濃 | 19 | 24 | 17 | |
| 262 | 13 | | 表採 | 須恵:甕体外 | 奈良 | 施印:美濃 個人藏 | 19 | 24 | | |
| 263 | 14 | 8-4 | 包含層 | 灰釉:盤皿内 | 平安前Ⅰ | ヘラ絵画:鹿・鳥? | 19 | 24 | 8-9-10 | |

石帶

| | | | | | | | | | | |
|-----|----|------|----------|----|-------|--------------|----|----|------|--|
| 264 | 1 | | 不明 | 丸鞘 | 平安 | ほぼ完形 黒灰色 | 16 | 25 | | |
| 265 | 2 | | 表採 | 巡方 | 平安 | ほぼ完形 黄緑色 個人藏 | 16 | 25 | | |
| 266 | 3 | 8-8 | 包含層 | 巡方 | 平安 | 両脇欠 黒色 | 16 | 25 | 8-10 | |
| 267 | 4 | 8-10 | P I T | 丸鞘 | 平安 | 完形 白色 | 16 | 25 | 8-10 | |
| 268 | 5 | 23 | S B 1155 | 丸鞘 | 平安 | ほぼ完形 灰色 | 16 | 25 | 14 | |
| 269 | 6 | 32 | 包含層 | 鉈尾 | 平安 | 一部欠損 黒色 | 16 | 25 | 15 | |
| 270 | 7 | 38 | 包含層 | 丸鞘 | 平安 | 完形 黒色 | 16 | 25 | 16 | |
| 271 | 8 | 51 | S K 3130 | 丸鞘 | 奈良~平初 | 完形 白色 | 16 | 25 | 18 | |
| 272 | 9 | 52 | S E 3260 | 鉈尾 | 平安前 | ほぼ完形 黒色 | 16 | 25 | 18 | |
| 273 | 10 | 54 | 包含層 | 丸鞘 | 平安 | 完形 緑色 | 16 | 25 | 22 | |
| 274 | 11 | 56 | 包含層 | 丸鞘 | 平安 | 完形 水色 | 16 | 25 | 22 | |

参考文献一覧

| 文獻番号 | 書名 | 発行所 | 発行年 |
|------|-------------------------------------|----------------------|--------|
| 1 | 古里遺跡発掘調査概報 | 明和町教育委員会 | 1970.8 |
| 2 | 古里遺跡発掘調査概報 | 三重県教育委員会 | 1972.3 |
| 3 | 古里遺跡斎王宮趾 | 三重県教育委員会 | 1973 |
| 4 | 古里遺跡発掘調査報告（C地区） | 三重県教育委員会 | 1973.3 |
| 5 | 古里遺跡・斎王宮址 | 三重県教育委員会 | 1974 |
| 6 | 古里遺跡発掘調査報告（D地区） | 三重県教育委員会 | 1974.3 |
| 7 | 斎王宮跡発掘調査報告Ⅰ | 三重県教育委員会 | 1974.3 |
| 8 | 古里遺跡・斎王宮跡 | 三重県教育委員会 | 1975 |
| 9 | 斎王宮跡発掘調査報告Ⅱ | 三重県教育委員会 | 1975.3 |
| 10 | 斎王宮址－範囲確認調査概要－ | 三重県教育委員会 | 1976.9 |
| 11 | 斎王宮址－広域市町村圈道路調査－ | 明和町教育委員会・三重県教育委員会 | 1977 |
| 12 | 斎王宮址－昭和52年度発掘調査概要－ | 三重県教育委員会 | 1978 |
| 13 | 昭和53年度 斎宮跡発掘調査概報 | 三重県教育委員会 | 1979.3 |
| 14 | 三重県斎宮跡調査事務所年報1979 史跡 斎宮跡－発掘調査概報－ | 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 | 1980.3 |
| 15 | 三重県斎宮跡調査事務所年報1980 史跡 斎宮跡－発掘調査概報－ | 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 | 1981.3 |
| 16 | 三重県斎宮跡調査事務所年報1981 史跡 斎宮跡－発掘調査概報－ | 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 | 1982.3 |
| 17 | 三重県斎宮跡調査事務所年報1982 史跡 斎宮跡－発掘調査概報－ | 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 | 1983.3 |
| 18 | 三重県斎宮跡調査事務所年報1983 史跡 斎宮跡－発掘調査概報－ | 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 | 1984.3 |
| 19 | 史跡 斎宮跡 昭和58年度現状変更緊急発掘調査報告 | 明和町・三重県斎宮跡調査事務所 | 1984.3 |
| 20 | 史跡 斎宮跡 第37-4次発掘調査報告 | 明和町・三重県斎宮跡調査事務所 | 1985.3 |
| 21 | 史跡 斎宮跡 斎宮小学校内発掘調査報告 | 明和町教育委員会 | 1985.3 |
| 22 | 三重県斎宮跡調査事務所年報1984 史跡 斎宮跡－発掘調査概報－ | 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 | 1985.3 |
| 23 | 史跡 斎宮跡 昭和59年度現状変更緊急発掘調査報告 | 明和町・三重県斎宮跡調査事務所 | 1985.3 |
| 24 | 三重県斎宮跡調査事務所年報1985 史跡 斎宮跡－発掘調査概報－ | 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 | 1986.3 |
| 25 | 史跡 斎宮跡 昭和60年度現状変更緊急発掘調査報告 | 明和町・三重県斎宮跡調査事務所 | 1986.3 |
| 26 | 三重県斎宮跡調査事務所年報1986 史跡 斎宮跡－発掘調査概報－ | 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 | 1987.3 |
| 27 | 史跡 斎宮跡 昭和61年度現状変更緊急発掘調査報告 | 明和町・三重県斎宮跡調査事務所 | 1987.3 |
| 28 | 三重県斎宮跡調査事務所年報1987 史跡 斎宮跡－発掘調査概報－ | 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 | 1988.3 |
| 29 | 史跡 斎宮跡 昭和62年度現状変更緊急発掘調査報告 | 明和町・三重県斎宮跡調査事務所 | 1988.3 |
| 30 | 三重県斎宮跡調査事務所年報1988 史跡 斎宮跡－発掘調査概報－ | 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所 | 1989.3 |
| 31 | 史跡 斎宮跡 昭和63年度現状変更緊急発掘調査報告 | 明和町・三重県斎宮跡調査事務所 | 1989.3 |

<参考>

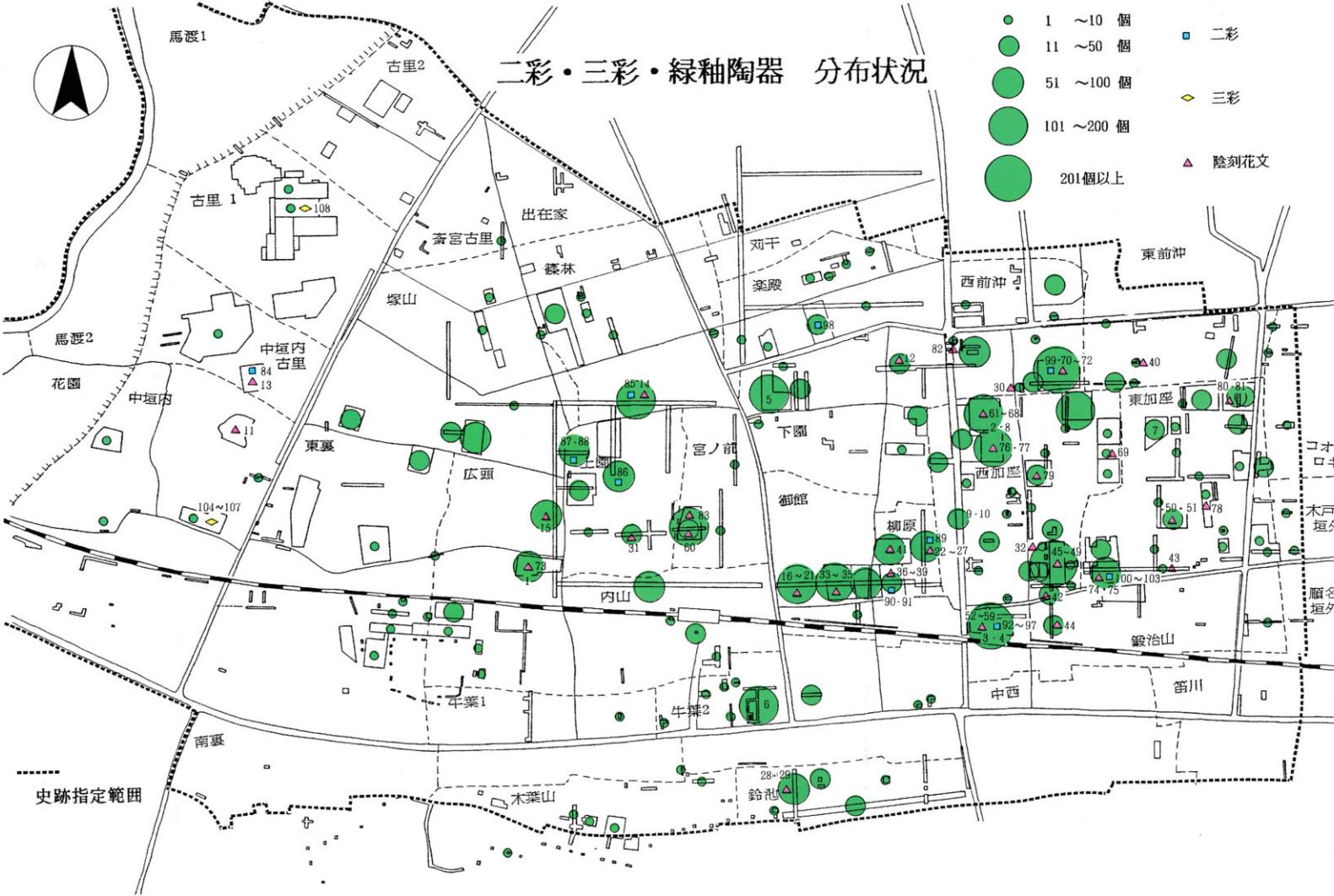
第1次～17次調査の概要是『斎王宮跡資料－発掘調査・文献資料－』（三重県教育委員会1978.9）にまとめてある。

また、No 1-2-3-5-8-10-11-12は『斎王宮跡発掘』（斎宮研究会編1978.11）として合本刊行したものがある。

史跡 斎宮跡



二彩・三彩・綠釉陶器 分布状況



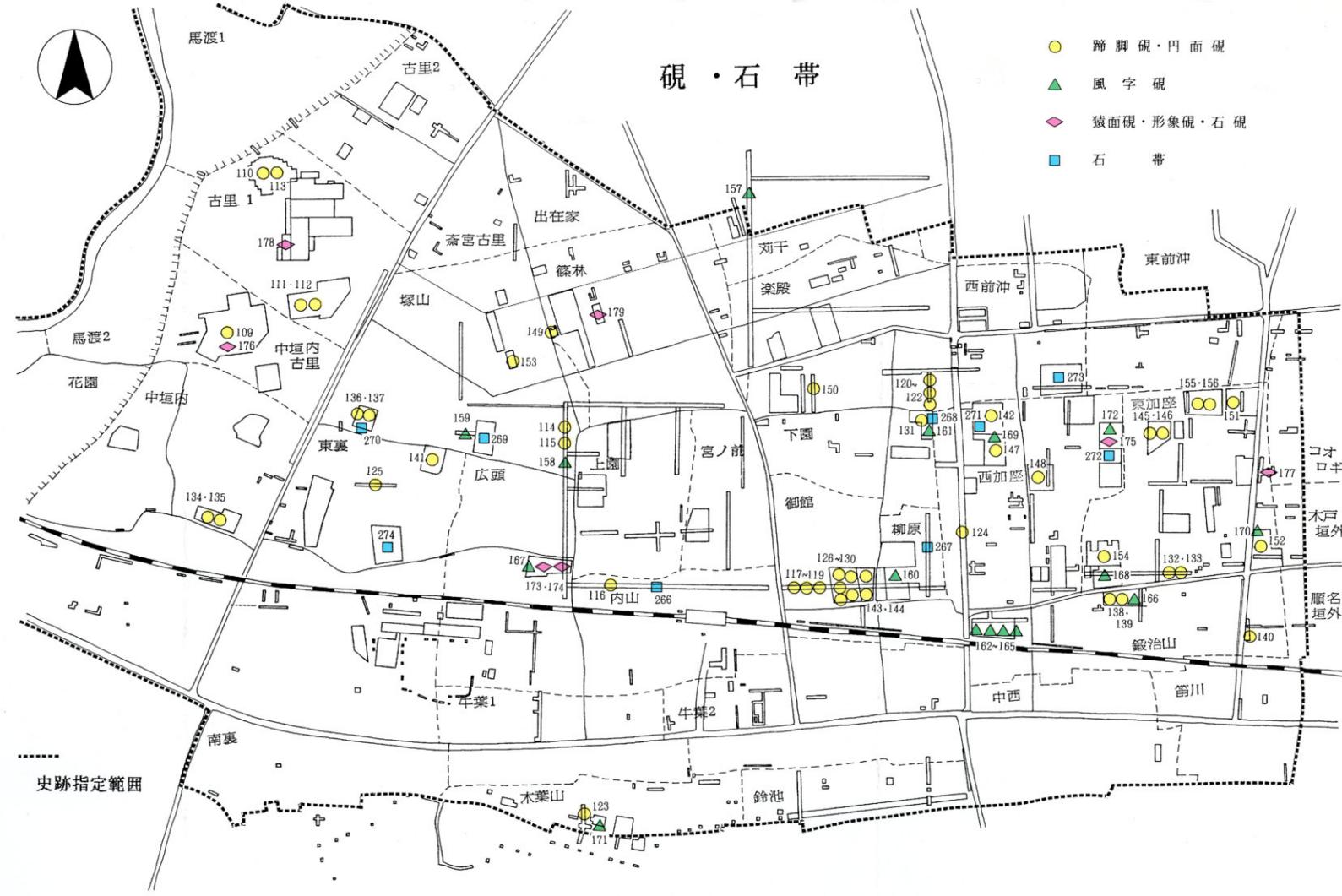
硯・石帶

蹄脚硯・円面硯

風字硯

猿面硯・形象硯・石硯

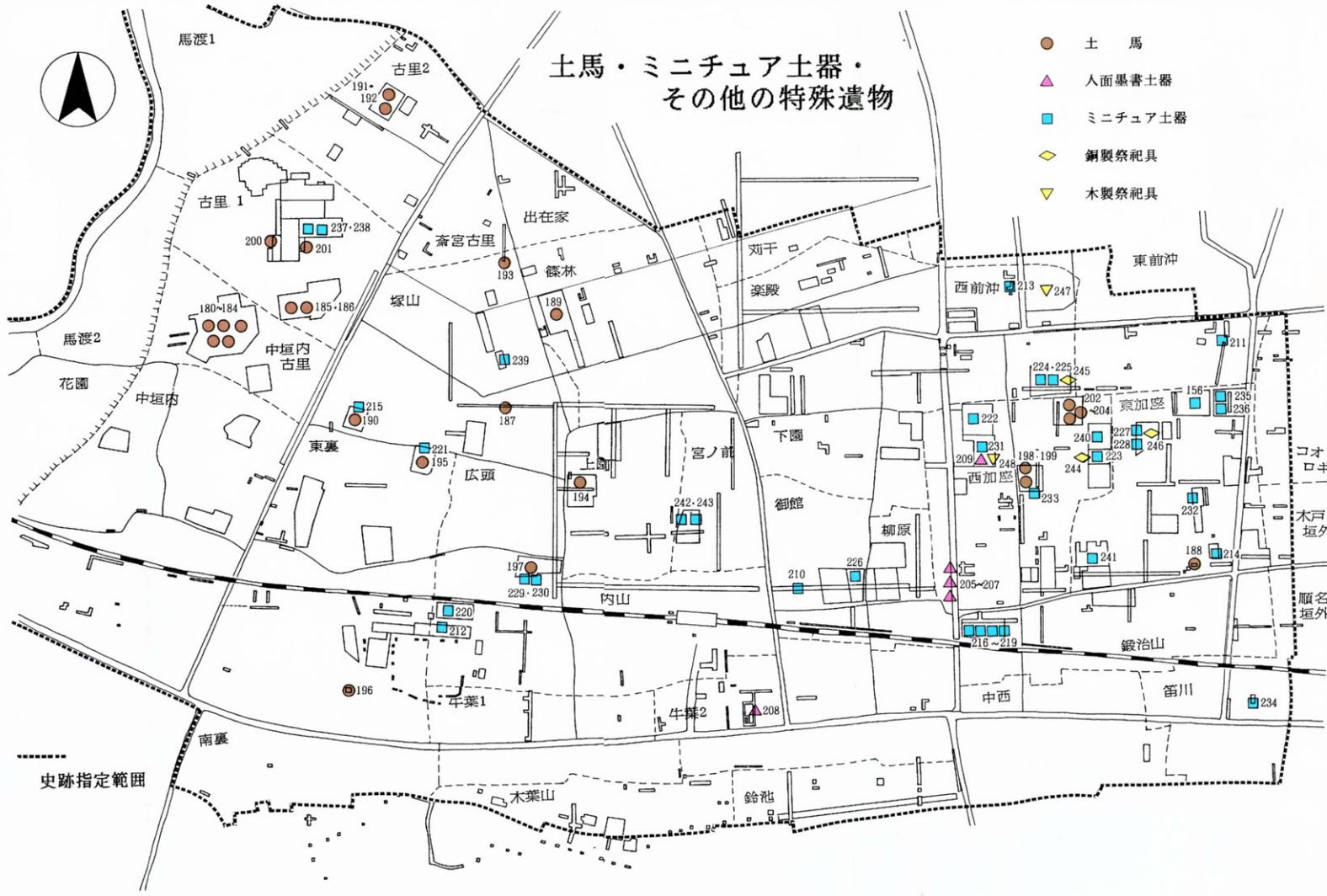
石帶



史跡指定範囲

土馬・ミニチュア土器・ その他の特殊遺物

- 土馬
- ▲ 人面墨書き土器
- ミニチュア土器
- ◆ 銅製祭祀具
- ▼ 木製祭祀具



斎宮跡発掘資料選

平成元年10月18日

編集発行 斎宮歴史博物館
三重県多気郡明和町竹川503
印刷 オリエンタル印刷

